

教育開発支援機構

教育開発・学習支援センター

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

教育開発・学習支援センター（以下、LFセンター）では、2020年度は、新型コロナウイルス感染症禍により強いられたオンライン学習の環境整備に向け、学習支援システムのシステム増強およびメンテナンス強化を行い、本学で提供する各種ツールの、ファーストガイドを作成、公表し、オンラインを活用した授業実施の支援を行った。教員学生の支援に努めたことは評価できる。引き続き、FD推進センターおよび学習環境支援センターから引き継いだ事業について点検するとともに、これから新たに取り組むべき目標を立て、全学的な教育開発・学習支援活動に取り組まれることを期待する。「学生による授業改善アンケート」に関しては、教員の教育の質や学生の学びの質を向上させる仕組みの検討を引き続き期待したい。

新型コロナウイルス感染症を防ぎながら教育活動を行ってゆくことは全学的な課題である。オンライン授業の充実、問題点の洗い出し、学生個々のケア、対面型授業における工夫等、3センターで力を合わせ、問題解決に取り組まれることを期待する。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

オンライン教育学習支援に関して、増強された学習支援システムは学習支援システム運営委員会および学習支援システム運用会議で効率的な運用体制を図っている。また、本学で提供する各種ツールの使用ガイドはアクセスビリティを念頭に整理し、その情報をWeb掲示板やNewsletterなどで周知している。これらに加え、対面も含めた授業改善への支援を、引き続き、専任教員・兼任講師を対象に授業リフレクションのための学生による授業参観や授業相互参観、FD教員セミナーやNewsletterで行う予定である。

FD推進センターおよび学習環境支援センターから引き継いだ事業は、2020年度に3つのレベル（授業レベル支援、カリキュラムレベル支援、全学レベル支援）を背景に整理し、2021年度では対面・オンライン教育学習を念頭にそれらを点検しながら10項目の中期目標へ集約させた。今後、この中期目標達成を目指し、センター運営を行う予定である。

2021年度の見直し作業を踏まえ、2022年度より次期「学生による授業改善アンケート」を開始した。全学共通設問は同じであるが、各学部・研究科の独自質問・機能設定の活用を推進する方針である。それら集計結果は、授業レベルではリアルタイム、学部・研究科レベルでは授業終了後の単純集計が完了した時点で、これまでと同様にWeb上で共有できる。また、全学授業形態調査を「学生による授業改善アンケート」システムで2022年度より実施予定である。

対面・オンライン教育学習の新しい教育研究への対応は、LFセンター中期目標で設定している。LFセンターの主な役割であるFD視点の取り組みに加え、図書館、学生センター、キャリアセンターなどが参加する学習環境改善検討委員会や全学のピアサポートを統括するピアネット運営委員会を運営し、副学長プロジェクト「DXイニシアティブプロジェクト」と連携しながら、教育開発支援機構のもと他の3センターと協働する体制が整っている。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価評価】

教育開発・学習支援センター（以下、LFセンター）では、オンライン教育学習支援に関して、学習支援システム運営委員会および学習支援システム運用会議が増強された学習支援システムの効率的な運用体制を図っている。本学で提供する各種ツールの使用ガイドは、アクセスビリティを念頭に整理し、その情報をWeb掲示板やNewsletterなどで周知している。以上のことから、教員学生の支援に努めたことは評価できる。

FD推進センターおよび学習環境支援センターから引き継いだ事業については、対面・オンライン教育学習を念頭に点検しながら10項目の中期目標へ集約させた。この中期目標の達成を目指し、全学的な教育開発・学習支援活動に取り組まれることを期待する。

「学生による授業改善アンケート」に関しては、教員の教育の質や学生の学びの質を向上させる基本的な仕組みとして実効性のある取り組みを継続することを期待したい。

LFセンターでは、その主な役割であるFD視点の取り組みに加え、図書館、学生センター、キャリアセンターなどが参加する学習環境改善検討委員会や全学のピアサポートを統括するピアネット運営委員会を運営し、副学長プロジェクト「DXイニシアティブプロジェクト」と連携しながら、教育開発支援機構のもと他の3センターと協働する体制が整っており評価できる。今後も3センターで協同して、対面・オンライン教育学習の新しい教育研究への対応等の課題解決に取

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

り組まれることを期待する。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

1.1①質保証活動に関する各種委員会（質保証委員会等）は適切に活動していますか。2018年度 1.1①に対応

はい

【2021年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

2021年度 第1回教育開発支援機構企画委員会

構成メンバー：委員長（機構長）、副委員長（担当常務理事・統括本部長）、委員 計10名

開催日：2021年4月22日（木）メール会議

議題等：(5) 各センターからの報告事項（報告）：2021年度LFセンター活動方針

2021年度 第2回学部長会議

構成メンバー：総長、理事、学部長、その他 計27名

開催日：2021年4月22日（木）15:00～

議題等：2（1）d. 2021年度LFセンター活動方針について

2021年度 第2回研究科長会議

構成メンバー：副学長、研究科長、その他 計22名

開催日：2021年5月13日（木）10:00～

議題等：7-13. 2021年度LFセンター活動方針について

2021年度 第9回教育開発支援機構企画委員会

構成メンバー：委員長（機構長）、副委員長（担当常務理事・統括本部長）、委員 計10名

開催日：2022年3月10日（木）19:00～

議題等：(10) 各センターからの報告事項（報告）：2021年度LFセンター活動報告

2021年度 第11回研究科長会議

構成メンバー：副学長、研究科長、その他 計22名

開催日：2022年3月17日（木）10:00～

議題等：7-7. 2021年度LFセンター活動報告について

2021年度 第20回学部長会議

構成メンバー：総長、理事、学部長、その他 計27名

開催日：2022年3月17日（木）15:00～

議題等：2（1）a. 2021年度LFセンター活動報告について

1.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。新規

※取り組みの概要を記入。

教育開発支援機構企画委員会は、センター長が委員として定期的に10回（4/22・5/13・7/1・9/23・10/21・11/25・12/23・1/20・2/22・3/10）出席しており、COVID-19によって刻々と変化する社会情勢への全学対応を適宜共有し、迅速でかつ合理的なセンター運営を行えた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

2021年度 教育開発支援機構企画委員会 議事録（全10回）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
学部長会議・研究科長会議で、センターの「活動方針」と「活動報告」を全学的に直接確認する体制は、迅速な確認を特色とする。同時に、学部長会議メンバーである教育開発支援機構長から、ユニット・リーダー会議で適宜情報共有される体制は、柔軟にきめ細やかで確かな情報の共有などを行える。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
学部長会議・研究科長会議で直接の全学的な内部質保証体制は極めて合理的である。しかし、非常時などに対し多様な意見や要望が生じた場合、その内容によっては当センター権限の範疇を超える可能性がある。そのため、教育開発支援機構のもと当センターが運営されている体系について周知徹底することやその原則が実現できるような運用上の工夫が必要かもしれない。

【内部質保証の評価】

LFセンターでは、4月の第1回教育開発支援機構企画委員会および第2回学部長会議、第2回研究科長会議において、当該年度のLFセンターの活動方針が決定され、審議・了承される手続きがとられている。教育開発支援機構企画委員会は、定期的に10回開催されており、COVID-19によって刻々と変化する社会情勢への全学対応を適宜共有し、迅速かつ合理的なセンター運営を行ってきた。3月には、センターの活動報告が、第9回教育開発支援機構企画委員会および第20回学部長会議、第11回研究科長会議に上程され、質保証活動の実質化と効率化が図られている。以上のことから、LFセンターの内部質保証は適切に行われていると判断される。

2 教員・教員組織**(1) 点検・評価項目における現状**

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

2.1①教員の質の維持・向上に取り組んでいますか。2021年度1.1①に対応

S: さらに改善することができた
※教員の質の維持・向上のためにどのような取り組みが行われているか概要を記入。
新しい対面・オンライン教育の支援を念頭に各種取り組みを行った。授業単位の支援として、(1)Web上での授業改善アンケート集計結果の提供、(2)Web上でのGP集計情報の提供、(3)新任教員FD研修会、(4)専任教員・兼任講師を対象に3回のオンラインFD教員セミナー、(5)2回のFDワークショップ、(6)教員による授業相互参観の確認、(7)派遣学生による授業参観を実施した。また、(8)シラバス作成ガイドラインの改定を行った。カリキュラム単位の支援として、(9)Web上での学部等別授業改善アンケート集計結果の提供、(10)Web上での学部等別GP集計情報の提供を実施した。また、(11)希望学部等にFD研修会を実施した。全学単位の支援として、(12)学習支援システム運営委員会を運営した。また、(13)現行の学生による授業改善アンケートに対する見直しを行い、(14)次期の学生による授業改善アンケートを設定した。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
(8)シラバスに授業形態項目を追加するとともに、英語表記の充実を図った。 (9)学部等の長にIDを発行し、Web上で学部等別授業改善アンケート集計情報を確認する仕組みを施行した。 (13)現行実施5年目を迎え、学部・研究科から改善等の要望を募り、次期の学生による授業改善アンケートを検討した。 (14)次期の「学生による授業改善アンケート」を設定した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
(1) (9) 2021年度第2回学部長会議資料1-1・第11回学部長会議資料1-2 (2) (10)2021年度第6回学部長会議資料1-1・第13回学部長会議資料1・第7回研究科長会議資料11

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

- (3) 2021年度第18回学部長会議資料 6
 (4) 2021年度第8・13・17回学部長会議資料報告・第7回研究科長会議資料17・第10回研究科長会議資料24
 (5) 2021年度第8回学部長会議資料報告・第9回学部長会議資料15
 (6) 2021年度第2回学部長会議資料1-3
 (7) 2021年度第9回学部長会議資料1-2
 (8) 2021年度第11回学部長会議資料1-1
 (11) 2021年度第6回学部長会議資料1-2
 (12) 2021年度第1・2回学習支援システム運営委員会議事録
 (13) 2021年度第8回学部長会議資料2-1・第5回研究科長会議資料29
 (14) 2021年度第17回学部長会議資料1・第10回研究科長会議資料17

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
教員が教育する観点で支援するセンター運営体制が長所である。その業務は3つのレベル（授業レベル支援、カリキュラムレベル支援、全学レベル支援）に整理され、3つのユニットが協働しながら効率的な運営体制を整えているのが特色である。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
対面・オンライン教育学習のなか、実施されている授業形態を把握し、改善・新たな施策を遂行するためが必要である。

【教員・教員組織の評価】

LFセンターにおいて、Web上での授業改善アンケート集計結果の提供や、Web上でのGP集計情報の提供、新任教員FD研修会、専任教員・兼任講師を対象に3回のオンラインFD教員セミナー、2回のFDワークショップなど、新しい対面・オンライン教育をも念頭にした様々な取り組み及び指導を行っていることは評価できる。学習支援システム運営委員会及び毎月開催される学習支援システム運用会議で運用システムなど定常的な対応を行っていることは評価できる。センター運営の長所である教員が教育する観点から支援する運営体制は評価できる。教育の質向上のためにも、今後は、学生アンケートだけでなく、教員アンケートの実施を検討することを期待したい。

3 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

3.1①学生の主体的な学習を支援するための取り組みを行っていますか。2021年度2.1①に対応

S：さらに改善することができた

【学生の主体的な学習を支援するための取り組み】※箇条書きで記入。

対面・オンライン学習の支援を念頭に各種取り組みを行った。授業単位の支援として、(1)学習支援ハンドブックの改訂およびオンデマンドコンテンツ化、(2)新入生サポート、(3)博士後期課程生に提供するプレFDの検討を行った。カリキュラム単位の支援として、(4)授業形態に関する学生対象アンケートを実施し、学修・学習における対面・オンライン学習の支援を検討した。全学単位の支援として、(5)ピアネット運営委員会による全学的正課外学習支援（ピアネットガイドの発行）および合同研修会実施、(6)学習ステーションのLステゼミへ10回の講座提供とともに、(7)学習環境改善検討委員会の運営も行い、キャンパス内におけるオンライン授業の受講スペースの確保等の検討を行った。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- (1) 電子冊子体（デジタルブック）としてデジタルコンテンツの提供を開始した。また、主要な項目のオンデマンドコンテンツを充実させた。
- (2) コロナ禍のなか、社会情勢に合わせた柔軟な開催を行った。
- (3) プレFDとして博士後期課程の学生を対象とした参加イベントを設定するとともに、プログラムとして企画の検討を始めた。
- (4) コロナ禍のなか、学習状況を把握するために実施した。また、今後同様な取り組みについて企画を検討した。
- (5) ピアネット合同研修会を実施するとともに、ピアネットコンピテンシーの検証・見直しについて実験的取り組みも行った。
- (6) 正課外学習における学術的な充実を図った。
- (7) 全学的な学習環境の情報共有を図り、課題を見出すプラットフォームとして確立した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- (1) デジタルブック：
<https://hosei-hondana.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjo5NzcxN30=&detailFlg=1&pNo=1>
 オンデマンドコンテンツ：
<https://lms.hosei.ac.jp/rpv/home/course/default.aspx?k=kHJqhzFhwIxta%2f9C7JDMPZkk7Aw7rrdeK44peBZZC4%3d>
- (2) 新入生サポート案内：<https://www.hosei.ac.jp/gakuseishien/info/article-20210302134509/>
- (3) 2021年度第10回ユニット・リーダー会議資料 3-2
- (4) 2021年度第11回学部長会議資料 1-3
- (5) ピアネットガイド：
<https://hosei-hondana.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjo5NzcxN30=&detailFlg=1&pNo=1>
 合同研修会：2021年度第10回ユニット・リーダー会議資料 3-2
- (6) 学習ステーション活動報告：<http://peernet.i.hosei.ac.jp/lstation/report/>
- (7) 2021年度第1・2回学習環境改善検討委員会議事次第

3.1②学生の学習環境や教員の教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。2021年度2.1②に対応

※取り組みの概要を記入。

上記(1)～(7)に対して対策を行ったものを記した。

- (1) 冊子体の発行に加え、デジタルブック化およびオンデマンドコンテンツ化を図った。
- (2) 原則対面実施としたが、一部オンライン開催を導入した。
- (4) 対面・オンライン学習における受講実態調査を行った。
- (5) ピアネットガイドの電子冊子化を図った。
- (6) 概ねリアルタイムオンライン開催とした。
- (7) 図書館と学生センターと調整しながら、キャンパス内でオンライン授業受講スペースの確保とその利用設定をした。教室内の各机に設置するアクリル板を一部可動式に変更し、流動的な教室利用を可能とした。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- (1) デジタルブック：
<https://hosei-hondana.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjo5NzcxN30=&detailFlg=1&pNo=1>
 オンデマンドコンテンツ：
<https://lms.hosei.ac.jp/rpv/home/course/default.aspx?k=kHJqhzFhwIxta%2f9C7JDMPZkk7Aw7rrdeK44peBZZC4%3d>
- (2) 新入生サポート案内：<https://www.hosei.ac.jp/gakuseishien/info/article-20210302134509/>
- (4) 2021年度第11回学部長会議資料 1-3
- (5) ピアネットガイド：
<https://hosei-hondana.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjo5NzcxN30=&detailFlg=1&pNo=1>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

合同研修会：2021年度第10回ユニット・リーダー会議資料3-2

(6) 学習ステーション活動報告：<http://peernet.i.hosei.ac.jp/lstation/report/>

(7) 2021年度第1・2回学習環境改善検討委員会議事次第

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
学生が学習する観点で支援するセンター運営体制が長所である。その業務は3つのレベル（授業レベル支援、カリキュラムレベル支援、全学レベル支援）に整理され、3つのユニットが協働しながら効率的な運営体制を整えているのが特色である。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
当センターでは、正課学習支援に加え、正課外学習支援を行っている。対面とオンラインが混在する新しい環境下での学習が展開されるため、受講状況を把握するなどが課題である。 正課外学習成果がどのように正課学習を向上させるか、また大学全体の学びにおける位置付けを明確にすることが課題である。

【教育研究等環境の評価】

LFセンターにおいて、授業単位の支援として、(1)学習支援ハンドブックの改訂、オンデマンドコンテンツ化、(2)新入生サポート、(3)博士後期課程生に提供するプレFDの検討を行ったほか、カリキュラム単位の支援として、(4)授業形態に関する学生対象アンケートの実施、学習における対面・オンライン学習の支援を検討するなど、コロナ禍の対応として、対面・オンライン学習の支援を念頭に各種取り組みを積極的に行ったことは評価できる。また、全学単位の支援として、ピアネット運営委員会による全学的正課外学習支援（ピアネットガイドの発行）および合同研修会の実施、学習ステーションのLステゼミへ10回の講座提供などキャンパス内におけるオンライン授業の受講スペースの確保等の検討を積極的に行ったことは評価できる。

4 社会貢献・社会連携

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

4.1①社会貢献活動を行っていますか。2018年度3.1①に対応

S：さらに改善することができた

※活動概要を記入。

- (1) 大学教育学会に団体会員として所属した。
- (2) 初年次教育学会に機関会員として所属した。
- (3) 日本リメディアル教育学会に大会員として所属した。
- (4) 全国私立大学FD連携フォーラム（JPF：Japan Private Universities FD Coalition Forum）（38大学加盟）に幹事校として参加し、幹事会・総会（6/19）、幹事校・会員校ミーティング（1/28）に出席した。また、2021年度シンポジウム（6/19）で講演をした。
- (5) 関東圏FD連絡会（青山学院大学・國學院大学・東洋大学・法政大学・立教大学）に参加し、連絡会（7/5・12/13）に出席した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

(6) 大学 ICT 推進協議会 教育技術開発部会 (AXIES EdTech 部会) の AXIES 教育技術開発部会 第 13 回研究会 (8/27) で講演をした。
(7) 法政大学情報メディア教育研究センター主催の情報メディア教育研究センターシンポジウム 2022 (3/9) で講演をした。
(8) 教育開発学習支援センター及び学務部主催の第 22 回 FD ワークショップ (千代田区キャンパスコンソーシアムとの共催) (9/4) で講演をした。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
3 件の招待講演で、DX に関わる当センターの取り組みを紹介した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
(1) (2) (3) (5) 特になし
(4) http://www.fd-forum.org/fd-forum/
(6) https://edtech.axies.jp/event/257/
(7) https://www.hosei.ac.jp/media/info/article-20220127141026/

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
全国私立大学で取り組まれている FD・SD 活動を共有し、それらの連携を企画できる。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
FD に関連する学会等に所属しているが、すべてを活用しきれていない実態を踏まえ、活動実績のある学会等の活動に集中するといった検討をしたい

【社会貢献・社会連携の評価】

LF センターは、全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF : Japan Private Universities FD Coalition Forum) (38 大学加盟) に幹事校として参加し、幹事会・総会 (6/19)、幹事校・会員校ミーティング (1/28) に出席したほか、2021 年度シンポジウム (6/19)、大学 ICT 推進協議会 教育技術開発部会 (AXIES EdTech 部会) の AXIES 教育技術開発部会 第 13 回研究会 (8/27)、法政大学情報メディア教育研究センター主催の情報メディア教育研究センターシンポジウム 2022 (3/9)、教育開発学習支援センター及び学務部主催の第 22 回 FD ワークショップ (千代田区キャンパスコンソーシアムとの共催) (9/4) で講演をするなど全国私立大学で取り組まれている FD・SD 活動に積極的に参加しており評価できる。
--

5 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

5.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018 年度 4.1①に対応

はい
※概要を記入。
(1) 教育開発・学習支援センター規程にもとづき、センター長、ユニット・リーダー、ユニット・サブリーダー、ユニット・メンバーを置き、同規程に定められた職務を遂行した。2021 年度はユニット・リーダー会議を 10 回開催した。また、

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S」：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

当センター内規となる業務運用（申し合わせ）、広報方針、中期目標および業務内容に基づき、各ユニット会議が適切に運営された。

(2) 学習環境改善検討委員会規程にもとづき、センター長、学習サポートユニット・リーダーおよびサブリーダーを中心に同規程に定められた職務を遂行した。2021年度は2回開催した。

(3) 学習支援システム運営委員会規程にもとづき、センター長、教育ユニット・リーダーを中心に同規程に定められた職務を遂行した。2021年度は2回開催した。また、学習支援システム運用会議議長を指名し、2021年度は11回の運用会議を開催した。

(4) 法政大学ピアネット規程にもとづき、学習サポートユニット・リーダーおよびサブリーダーを中心に同規程に定められた職務を遂行した。2021年は7回のピアネット運営委員会を開催した。

(5) 学習ステーション規程にもとづき、学習ステーション長として学習サポートユニット・サブリーダーをおき、同規程に定められた職務を遂行した。2021年は6回の学習ステーション運営委員会を開催した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- (1) 教育開発・学習支援センター規程（規定第1329号）
教育開発・学習支援センターの業務運用（申し合わせ）
教育開発・学習支援センターの広報方針
中期目標および業務内容リスト
- (2) 学習環境改善検討委員会（規定第1330号）
- (3) 学習支援システム運営委員会（規定第1082号）
- (4) 法政大学ピアネット規程（規定第1114号）
- (5) 学習ステーション規程（規定第1071号）

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

FD・SDに関する全学的な取り組みを、当センターが統括する体系的な組織となっている。また、正課外活動の運営を担う組織が含まれていることが特色である。

（3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

全学共通の正課外活動は、それを取りまとめるピアネットで運営している。一方、全学共通の正課活動は、教育開発支援機構で運営されており、管理レベルに違いがある。全学共通の正課活動と正課外活動には一定の連携が求められ、それらの管理体制について今後検討が必要かもしれない。また、教育学習のデジタル化が進み、それらを統合するデータベースが構築されつつある。他部局で利用するデータベースも含めて、その管理運営の組織体系化も必要かもしれない。

【大学運営・財務の評価】

LFセンターでは、「教育開発・学習支援センター規程」に基づき、センター長、ユニット・リーダー、ユニット・サブリーダー、ユニット・メンバーを置き、ユニット・リーダー会議を10回開催した。「学習環境改善検討委員会規程」に基づき、センター長、学習サポートユニット・リーダーおよびサブリーダーを中心に会議を2回開催したほか、学習支援システム運用会議議長を指名し、11回の運用会議を開催した。「法政大学ピアネット規程」に基づき、学習サポートユニット・リーダーおよびサブリーダーを中心にピアネット運営委員会を7回開催した。「学習ステーション規程」に基づき、学習ステーション長として学習サポートユニット・サブリーダーを置き、学習ステーション運営委員会を6回開催した。以上のことから、運営委員会等の運営は適切に行われていると判断される。正課外活動と正課活動の運営が別になされていることから、今後、両者の管理運営の組織体系化の課題となろう。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

Ⅲ 2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	あらゆる立場の人びとへの共感に基づく健全な批判精神をもち、社会の課題解決につながる「実践知」を創出しつづけることを謳った法政大学憲章を実現すべく、教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画、FD 活動の推進および各教学組織における FD 活動の支援を行う。(FD 推進センター)
	年度目標	(1) 全学的な教育支援施策の企画 (1-1) 教育開発・学習支援センターの中長期運営方針の策定 (1-2) DX イニシアティブプロジェクトとの連携 (1-3) センター活動の学内 PR 強化 (2) FD 活動の推進および各教学組織における FD 活動の支援 (2-1) 授業改善アンケートの点検と活用 (2-2) オンライン授業に関する情報共有の施策検討 (2-3) 授業改善アンケートと他アンケートとの連携の検討 (2-4) ミドル・レベル(学部・学科単位)での FD 活動支援の拡大 (2-5) 新 GPA 制度の活用に関する指針策定の検討 (2-6) 正課外学習の充実 (2-7) 学生の主体的な正課学習への支援
	達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S : 80%以上 A : 70-79% B : 60-69% C : 60%未満
1	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	年度末報告 理由	年度目標とした全 10 項目を達成し「S」とした。 (1-1) 次期中期目標を策定した。 (1-2) DX イニシアティブプロジェクトと継続して連携した。第 22 回 FD ワークショップでは DX をテーマとして取り上げた。 (1-3) 広報指針に従って、Web 掲示板や SNS を積極的に活用した。また、3 年ぶりにニューズレターを発行し、FD 教員セミナー実施報告等、全学共有を行った。 (2-1) 授業アンケートの全学集計を分析し報告書をまとめた。 (2-2) 授業形態に関する学生アンケートを実施した。オンライン授業に資する FD 教員セミナーを 3 回(教員間議論、剽窃ソフト、著作物の教材利用&グッドプラクティスの共有)開催した。 (2-3) 大学評価室と連携し、授業形態に関する学生アンケートの企画・集計・分析を行った。 (2-4) FD 教員研修を企画し、2 学部で実施した。 (2-5) 新 GPA 制度に対し、作成した全学的 GPCA データセットを分析した。 (2-6) ピアネット運営委員会で全学的正課外学習支援を行った。また、学習ステーションの L ステゼミに本学教員などによる講座を 10 回提供した。 (2-7) 「学習支援ハンドブック」にオンライン授業に関する追記をするなど全面的に改訂した。ディプロマポリシーの活用について議論した。
改善策	—	
No	評価基準	教育研究等環境

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

2	中期目標	<p>教育および学びの質の向上を促進するため、教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援に向けた全学的な施策の企画・提案・調整を行う。(LEC)</p> <p>①市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を検討の上、改善策や対応策を講ずる。</p> <p>②HOSEI2030 アクション・プラン(教学推進4 アクティブラーニング・実践知育成の学び)に基づき、大人数授業における学生の授業サポーター(ないし学習サポーター)制度の設置に向けて検討を開始する。</p> <p>③第一期中期経営計画に基づき、ピアネット合同企画の実施等、さらなるユニット間の連携強化に取り組む。</p> <p>④第一期中期経営計画に基づき、ピアネット・コンピテンシーおよびバリューループリックについて検証を開始する。</p>
	年度目標	<p>(1) 対面・オンライン授業が共存する学習環境の整備について学習環境改善検討委員会で検討</p> <p>(2) 授業アシスタント制度(授業支援アシスタント、ラーニングサポーター)の効果的な運用</p> <p>(3) 合同研修会、ピアネット所属ユニットの協同プログラムの実施</p> <p>(4) ピアネット・コンピテンシーおよびバリューループリックについて検証</p>
	達成指標	<p>年度目標の達成率にて評価する。</p> <p>S: 80%以上</p> <p>A: 70-79%</p> <p>B: 60-69%</p> <p>C: 60%未満</p>
	年度末報告	<p>執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由</p> <p>年度目標とした全4項目を達成し「S」とした。</p> <p>(1) 定例開催とし、全学的な学習環境を検討し、キャンパスごとの特性を共有しながら、学習環境整備の方針を確認した。</p> <p>(2) 次年度より引き続き、授業支援アシスタントおよびラーニングサポーター採用枠を一時的に増枠し、教員のオンライン授業を支援した。</p> <p>(3) 合同研修会を実施した。</p> <p>(4) ピアネット・コンピテンシーテストを見直し改訂テストを作成し、その予備的調査を実施した。今後改訂テストのピアネット・コンピテンシー評価に対する検証を予定している。</p> <p>改善策</p> <p>—</p>
<p>【重点目標】</p> <p>教員・教員組織の年度目標(1)と教育研究等環境の年度目標(2)を総合し、終局的に次期(2022年度より)中期目標策定を重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>改組で引き継いだ76事業を整理した「LFセンター体制における引継ぎ業務の位置付け」に基づくSTP分析から「2021年度LFセンター業務案」をユニット・リーダー会議で共有している。中期的な本学の教育学習環境のイメージを、対面とオンラインの教育学習環境が共利共生する利活用など、リーダー会議で検討する。加えて、学内デジタルトランスフォーメーション整備を担うDXイニシアティブプロジェクトとの連携をしながら、教育開発支援機構内の点検や助言を得て、センター中期目標策定を目指す。</p> <p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>今年度は教育開発・学習支援センター設置2年目だが、新しい対面・オンライン教育学習に向け、高い効果を期待する柔軟な各種取り組みを実施できた。特筆すべきは、「2021年度LFセンター業務案」に基づきユニット・リーダー会議で議</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

論を重ねた結果、教員・教員組織に関する5つの目標および教育研究等環境に関する5つの目標で構成する次期中期目標を策定した点である。今年度目標に含まれていた事業は、センターの4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指し設定していたが、実際は刻々と変化する社会情勢のなかで展開せざるを得ない環境であった。しかし、設定したすべての事業は、毎月のユニット・リーダー会議でセンター全体として共有し、各ユニットが主体性を発揮することで各種取り組みは効果的に実施された。これらの経験は、今年度目標を十分達成させただけでなく、新しいセンターとして今後継承されていく質的向上があったと考えている。

【2021年度目標の達成状況に関する大学評価】

LFセンターでは、「教員・教員組織」に関する2020年度の目標である「全学的な教育支援施策の企画」3項目、および「FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援」7項目の計10項目について年度目標を達成したことは評価できる。また、「教育研究等環境」に関する2020年度の目標についても全4項目すべてを達成したことは評価できる。

IV 2022年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教員・教員組織
1	中期目標	教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。2020年度のコロナ禍で激変した教育学習に対して、「(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援」「(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進」「(3)教員支援のためのデジタルイゼーション促進とDX活用体制の構築」を専任教員・兼任講師を対象に広く支援する。さらに、「(4)学部FD支援体制の構築」および「(5)全学FD支援体制の構築」を確立し、組織的FD支援の実現を目指す。
	年度目標	<p>「(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援」に対する取り組み予定 (1-1) 授業相互参観の促進、(1-2) FD教員セミナー3回、(1-3) 新任教員研修会、(1-4) Newsletter、(1-5) シラバス(項目・ガイドライン)、(1-6) 授業改善アンケート実施</p> <p>「(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進」に対する取り組み予定 (2-1) 授業リフレクションのための学生による授業参観、(2-2) アカデミック・サポートサービス、(2-3) 各種コンテンツの電子アーカイブ(LFセンター年報など)</p> <p>「(3)教員支援のためのデジタルイゼーション促進とDX活用体制の構築」に対する取り組み予定 (3-1) DXイニシアティブプロジェクトとの連携、(3-2) 成績評価のあり方検討、(3-3) IR・他アンケートとの連携</p> <p>「(4)学部FD支援体制の構築」に対する取り組み予定 (4-1) 各教授会での研修実施、(4-2) ラーニングサポーター(教育開発支援機構主催)、(4-3) 学生モニター制度(教育開発支援機構主催)</p> <p>「(5)全学FD支援体制の構築」に対する取り組み予定 (5-1) 授業改善アンケート集計、(5-2) 学外連携(関東圏FD連絡会・JPPFミーティング・FDフォーラム[大学コンソーシアム京都]など)、(5-3) 自己点検報告書・目標設定</p>
	達成指標	全18項目の年度目標達成率にて評価する。 S: 80%以上 A: 70-79% B: 60-69% C: 60%未満
No	評価基準	教育研究等環境
2	中期目標	教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

	<p>学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。2020年度のコロナ禍で激変した教育研究等環境に対して、「(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援」「(2) 対面・オンライン学習環境における学生支援」を行う。さらに、支援する対面・オンライン教育学習環境をふまえ、「(3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充」「(4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討」によって学習の高度化を目指す。また、全学DX推進計画と連携した「(5) 学生カルテによる学修支援体制の構築」により学修の個別最適化を図る。</p>
年度目標	<p>「(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援」に対する取り組み予定 (1-1) 授業形態調査集計結果の企画・実施</p> <p>「(2) 対面・オンライン学習環境における学生支援」に対する取り組み予定 (2-1) 授業支援アシスタント、(2-2) 学習支援システム運営委員会の運営、(2-3) 学習支援ハンドブック活用の検討、(2-4) 学習環境改善検討委員会の運営、(2-5) GPCA集計の分析</p> <p>「(3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充」に対する取り組み予定 (3-1) HP・FB・Twitterの運営、(3-2) アクティブラーニングセット、(3-3) Turnitin、(3-4) 印刷代行、(3-5) アカデミック・サポートサービス(院生)、(3-6) BT賞企画・実施(教育開発支援機構主催)、(3-7) 電子アーカイブしたループリック(ゼミ用)の共有</p> <p>「(4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討」に対する取り組み予定 (4-1) ピアネット運営委員会の運営、(4-2) ピアネット合同研修会の実施、(4-3) 学習ステーションの運営、(4-4) 学生FDサミットへの参加、(4-5) プレFDの検討</p> <p>「(5) 学生カルテによる学修支援体制の構築」に対する取り組み予定 (5-1) DXイニシアティブプロジェクトとの連携</p>
達成指標	<p>全19項目の年度目標達成率にて評価する。</p> <p>S: 80%以上 A: 70-79% B: 60-69% C: 60%未満</p>

【重点目標】

LFセンターで実施する50の取り組みを骨格に、2022年度は37の目標を設定した。これらの目標は、授業レベル・全学レベル・学部等レベルで整理した2022年度活動計画を立て、対面・オンライン授業が混在する教育学習において、実効的支援を主眼に実施する。また、デジタルライゼーション促進とDX活用体制が全学的に進んでおり、特に学生カルテ設定とDP活用検討を重点課題としている。

【目標を達成するための施策等】

定例リーダー会議で、中期目標を共有しながら、各取り組みの企画・実施・振り返りを行い、その議論から柔軟で効率的な支援運営を行う。デジタル化関連では、DXイニシアティブプロジェクトと連携し、センター内での議論を教育開発支援機構内で深化させながら、機構内4センターと徹底した情報共有の協働を目指す。

【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

LFセンターでは、「教員・教員組織」に関する2022年度を初年度とする中期目標として、2020年度以降のコロナ禍で激変した教育学習に対して(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援、(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進、(3)教員支援のためのデジタルライゼーション促進とDX活用体制の構築を専任教員・兼任講師を対象に広く支援すること、(4)学部FD支援体制の構築、および(5)全学FD支援体制の構築を確立し、組織的FD支援の実現を目指すことが掲げられており、初年度である2022年度は、5項目の年度目標が示されている。中期目標・年度目標としては、いずれも適切かつ具体的に設定されている。

「教育研究等環境」に関する2022年度を初年度とする中期目標としては、(1)対面・オンライン教育学習環境の全学的支

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

援、(2)対面・オンライン学習環境における学生支援を行うことを目標として掲げるとともに、支援する対面・オンライン教育学習環境を踏まえ、(3)教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充、(4)正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携の検討によって学習の高度化を目指すとしている。また、全学 DX 推進計画と連携した(5)学生カルテによる学習支援体制の構築により学習の個別最適化を図る目標を掲げている。初年度である 2022 年度は、5 項目の年度目標が掲げられている。中期目標・年度目標としては、いずれも適切かつ具体的に設定されている。その目標を達成するために、定例リーダー会議等において、活発な議論がなされ、柔軟かつ効率的な運営がなされることを期待したい。

市ヶ谷リベラルアーツセンター

I 2021 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021 年度大学評価結果総評】(参考)

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2017 年度にスタートした新カリキュラムが 2020 年度で完成年度を迎えた。従来「基礎科目」として一括されていた科目が「三階建て」に再編され、より体系的な学びができるようになった。コロナ禍においては、大規模授業を含む専任・兼任の ILAC の全科目授業担当者に ILAC 独自の「春学期オンライン授業アンケート」を実施し、その調査結果は共有され秋学期での学習指導に活かされていることは評価できる。また、学生モニター制度を利用し「ILAC 教養教育とオンライン授業」をテーマとしたモニタリングを行っている。今後は新カリキュラムの課題の抽出や見直しの検討が重要な目標になってくる。「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」を中核に据えた長期的な視野に立っての検討を期待する。

新型コロナウイルス感染症を防ぎながら教育活動を行ってゆくことは全学的な課題である。オンライン授業の充実、問題点の洗い出し、学生個々のケア、対面型授業における工夫等、3センターで力を合わせ、問題解決に取り組まれることを期待する。

【2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2021 年度の大学評価結果では 2020 年度に完成年度を迎えた新カリキュラムの課題の抽出や見直しの検討と、オンライン授業の充実や問題点の洗い出し、学生個々のケアなどについて課題として指摘を受けた。それらの指摘を踏まえ、2021 年度にはそれらの課題に取り組んだ。

まず、前者については、各分科会で新カリキュラムに基づく授業の履修者動向をモニタリングし、その動向の結果ならびに要因の分析結果を ILAC 運営委員会にて情報共有し、検証を行った。ただし、授業における個々の課題、例えば教養ゼミのあり方の検討や履修の促進といった課題については十分には検討することができなかった。したがって、その点は 2022 年度に取り組むべき課題とした。

また、後者についても、分科会ごとでオンライン授業における工夫や効果的な独自の取り組み(グッドプラクティス)、課題等について意見集約し、その結果を ILAC 運営委員会にて情報共有を行った。2021 年度はオンライン授業に対する習熟も進み、効果的な取り組みも多数報告されるに至った一方、オンデマンド型・資料配布型の授業においては課題も指摘されている。それゆえ、2022 年度にはオンデマンド型・資料配布型の授業について、効果的な取り組みや課題、必要な環境等について検討を行っていく。

【2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンター(以下、ILAC)では、各分科会で新カリキュラムに基づく授業の履修者動向をモニタリングし、その動向の結果ならびに要因の分析結果を ILAC 運営委員会において情報共有し、検証を行っており評価できる。教養ゼミのあり方の検討や履修の促進といった個々の課題については、十分には検討することができなかったとのことであり、2022 年度は、この課題の解決に取り組むことを期待する。

分科会ごとに、オンライン授業における工夫や効果的な独自の取り組み(グッドプラクティス)、課題等について意見を集約し、その結果を ILAC 運営委員会において情報共有を行った。2021 年度はオンライン授業に対する習熟も進み、効果的な取り組みも多数報告されるに至ったことは大変評価できる。オンデマンド型・資料配布型の授業における課題が浮き彫りになったことから、2022 年度はオンデマンド型・資料配布型の授業について、効果的な取り組みや課題の解決、必要な環境整備の充実に取り組むことを期待したい。

II 自己点検・評価

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

1.1①質保証活動に関する各種委員会（質保証委員会等）は適切に活動していますか。2018年度1.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・全体的な質保証活動は、ILAC 運営委員会で行われている。
- ・分野別の質保証活動は、各分科会及び科目別運営委員会で行われている。特に英語分科会では独自の内部質保証委員会を置いている。また、キャリア教育関連科目・自校教育科目（「法政学への招待」等）・学部学科別「基礎ゼミ」については、独自の運営組織による質保証が行われている。
- ・授業以外の教育プロセス（履修指導など）の質保証は、学部で行われている。
- ・これらの各質保証組織（運営委員会、7分科会、6学部、法政学運営委員会およびキャリア教育運営委員会）の質保証における必須・オプションのプロセスを項目化し、チェックシートにまとめることで、「質保証の可視化」を行っている。
- ・2013年度から、ILAC 執行部および輪番の各学部委員数名で構成する「内部質保証委員会」を設置し、上記の各質保証組織から提出された現状分析チェックシートの内部監査を行なっている。そこで出された疑問点・改善点の指摘をうけて、各質保証プロセスはその改善を図る。

1.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19 への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。新規

※取り組みの概要を記入。

ILAC 科目における COVID-19 への対応は ILAC 運営委員会だけでなく、各分科会や各学部を中心に行うとともに、その対応の検証も実施している。具体的には、各科目や各分科会において、COVID-19 に対応するためのオンライン授業に対する工夫や効果を検証し、その情報の共有を ILAC 運営委員会にて行ってきた。また、それぞれにおける独自の効果的な取り組み（グッドプラクティス）についても情報の共有を行ってきた。なお、これらの取り組みは各質保証組織による内部質保証活動「自己点検チェックシート」における「効果的な授業形態の導入のとりくみ」の項目において確認を行っており、ILAC の内部質保証推進組織として対応している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第10回 ILAC 運営委員会議事録
- ・2021年度内部質保証委員会資料（2022年3月25日開催）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

(1) に記した内部質保証委員会の監査用に使用している現状分析チェックシートは、2013年度に考案された ILAC 独自の工夫である。その当時のチェックシートをベースにしつつも、毎年度、必要な項目の見直しを行い、その時々状況に合わせてブラッシュアップを行ってきた。したがって、毎年度の内部質保証活動において、適切な内容・項目をチェックすることができている。当シートの特記事項記述欄では分科会独自の取り組みを知ることができ、学習成果の指標の情報共有・相互啓発等においても有益である。また、それらの情報の共有は内部質保証活動の取り組みとしてだけでなく、ILAC 運営委員会の場でも適宜行われており、有用に働いている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

上記(2)の現状分析シートの特記事項欄の記載内容が、各質保証組織の組織的な取り組みなのか、それとも科目(授業担当者個人)単位なのか、判然としない場合もあるという指摘が過去の内部質保証委員会であったため、現在ではそれが判別できるようにチェックシートの微修正がなされている。ただし、各組織において記述が不統一であることから、さらなる修正が必要である。また、チェックシートの記述の情報量においても各組織で差が大きいことから、より多くの情報を引き出せるような改善が必要である。

【内部質保証の評価】

ILACにおける全体的な質保証活動は、ILAC運営委員会で、分野別の質保証活動は、各分科会及び科目別運営委員会で行われるなど複数の質保証組織(運営委員会、7分科会、6学部、法政学運営委員会およびキャリア教育運営委員会)でそれぞれ質保証活動を行っている。ILACでは、これらの各質保証組織の質保証における必須・オプションのプロセスを項目化し、チェックシートにまとめることで、「質保証の可視化」を行っている。以上のように、質保証活動に関する各種委員会は適切に機能していると評価できる。各組織において記述が不統一であること、チェックシートの記述の情報量も各組織で差が大きいことから、記述の統一化、情報量の精査等の改善がなされることを期待したい。

ILAC科目におけるCOVID-19への対応はILAC運営委員会だけでなく、各分科会や各学部を中心に行うとともに、その対応の検証も実施している。また、それぞれにおける独自の効果的な取り組み(グッドプラクティス)についても情報の共有を行うなど積極的な対応は評価できる。なお、これらの取り組みは各質保証組織による内部質保証活動「自己点検チェックシート」における「効果的な授業形態の導入のとりくみ」の項目において確認を行っている。以上のことから、ILACの内部質保証推進組織は、COVID-19への対応・対策の措置を講じるにあたって適切な役割を果たしているとは評価できる。

2 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

2.1①幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。2021年度 1.1①

【対応】

S: さらに改善することができた

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

市ヶ谷リベラルアーツセンター(ILAC)では、0群から5群の科目群までそれぞれバランスよく履修できる科目を配置し、多岐の分野に亘る幅広い教養が身につけられるようカリキュラム編成している。

2017年度にスタートし、2020年度で完成年度を迎えた新カリキュラムは、より順次的に、また、より体系的に教養教育科目を学べるように、従来「基礎科目」として一括されていたILAC各科目群を、ナンバリング100番台の〈基盤科目〉〈選択基盤科目〉、200番台の〈リベラルアーツ科目〉、300番台の〈総合科目・教養ゼミ〉と「三階建て」に再編したもので、これによって論理的な思考を順次高めていくことができ、総合的な判断力を形成できるフレームとなっている。また、0群において、現代的な視野と能力を形成する新しい取り組みの科目を導入・設置している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020年度に開設した「リベラルアーツ特別講座(金融リテラシー)」(0群設置)に引き続き、2021年度には、イオンフィナンシャルサービスグループと共同で科目運営する「リベラルアーツ特別実習(金融グローバルインターンシップ)」(0群設置)を新設した。本科目は2021年度の秋学期の期間に、国内外のインターンシップと準備学習、最終報告を行う授業であったが、2021年度においてはCOVID-19の影響により、インターンシップはオンラインでの実施となった。「リベラルアーツ特別講座」と同様に、「リベラルアーツ特別実習」の科目責任者もILAC副センター長が務める。

また、全学共通のプログラムである「ダイバーシティ・サティフィケート」プログラムに提供する科目として、「異文化コミュニケーション論B」「比較文化A」「Intercultural Communication B/C/D」「教養ゼミI・II(現代社会の人権問題A・B)」「教養ゼミI・II(在日朝鮮人の歴史A・B)」を新規に設置した。法政大学の学生が等しく身に付けているべき共通の教育としての「法政スタンダード」の策定のための検討は、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程のさらなる充実に寄与するものである。

さらに、2021年度においてはカリキュラムのスリム化に対応する中で、各分科会を中心に各科目の配置ならびにカリキュラムの適切性についての検証を行い、ILAC運営委員会にて情報の共有・検討を行った。次のカリキュラム改革を見据えて、2022年度以降も継続的にこれらの検討を行っていくことになる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2021年度 ILAC 科目「リベラルアーツ特別実習」シラバス (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=2119958&nendo=2021&gakubu_id=%E3%83%AA%E3%83%99%E3%83%A9%E3%83%AB%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%84&gakubueng=AX&t_mode=pc) ・ILAC 科目シラバス (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/head.php?gakubueng=AX&t_mode=sp) ・2021年度第9回 ILAC 運営委員会議事録

2.1②初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。2021年度 1.1②に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>新カリキュラムの「基盤科目」「選択基盤科目」は、高校までの学習と大学でのアカデミックな学習との橋渡しをする役割を自ずと果たしている。ILAC では100番台のナンバリングコードでそれを明示化している。</p> <p>アカデミック・リテラシー習得の役割をもつ初年次教育については、各学部主催の「基礎ゼミ」等と並んで、0群には一部の学部・学科の初年次ゼミナールに相当する「基礎ゼミ」が開設されている。また1群（人文科学）には、大学生として必要なライティングのリテラシー能力や論文作成能力を育てる「文章論」という科目が開設されている。これらはナンバリングコードにおいて、初年次教育を表す BSP100LA（分野：初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育（Basic study practice））が付されている。</p> <p>0群のキャリア教育関連科目（次項③参照、ナンバリングコード CAR100LA 分野：キャリア教育（Career education）を付している）や自校教育科目（「法政学への招待」）も、主として1・2年次に履修されることを期して編成された、学部を越えた共通科目である。</p> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年度に ILAC 執行部が作成し、ILAC 運営委員会で承認を受けた動画ファイル「ILAC と ILAC 科目ガイダンス」を用いて、2021年度から各学部での新生ガイダンスにおいて ILAC カリキュラムの説明を行っている。これによって、新生が大学の中での ILAC と ILAC 科目の群やナンバリングなどの構成を理解し、体系的、順次的な科目の履修を促すことになる。また、この動画は Youtube にて公開されている。 ・「基礎ゼミ」は ILAC の設置科目ではあるが、学部（文学部・キャリアデザイン学部）が独自に開講する科目と、学部横断で開講する科目とに分かれるなど扱いが複雑になっている状況にある。したがって、2021年度には「基礎ゼミ」の設置主体および実施主体の見直しを図るとともに、現状に合致した初年次教育としての「基礎ゼミ」のあり方を見直す検討を開始した。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ILAC と ILAC 科目紹介・説明動画コンテンツ (https://www.youtube.com/watch?v=6LxUr2QjHJ0) ・2021年度第11回 ILAC 運営委員会資料（新生向け ILAC カリキュラム紹介動画利用のご依頼） ・ILAC 科目シラバス (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/head.php?gakubueng=AX&t_mode=sp)

2.1③学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。2021年度

1.1③に対応

S : さらに改善することができた
<p>※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>0群に設置されている「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」は、キャリア教育運営委員会（ILAC センター長も委員として参加）が運営する実践的なキャリア支援教育科目である。ディスカッションやグループワークなどを通して課題発見・問題解決等の能力を養う授業が多く、FD 授業アンケートにおける学生の評価も毎年高い。キャリア教育運営委員会は、2017年度に「（目の先の就職活動に特化したようなプログラムではなく）正課の授業のなかからこそ就業力養成の意義がある」とする今までの教育理念・方針は堅持しつつ、キャリアセンターを中心として、インターンシップ・就職へも繋がる一貫したプログラムを実現すべく、新たなキャリア教育体制を再構築した。</p> <p>このキャリア教育体制の強化方針に基づき、2018年度から ILAC では新カリキュラムによる授業を行なっている。すなわち、既存のコマ配分を見直して新たに「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」の2種とし、なるべく1年</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>次春学期に導入科目である「キャリアデザイン入門」を履修できるようなカリキュラムに改訂し、2018年度から実施している。</p> <p>また、2019年度より、英語学位コース（GBP, SCOOP）として「Elementary Career Development」、「Career Development Skills」を0群に設置し、キャリア教育運営委員長とともに共同で科目責任者となって、共同運営している。さらに、キャリア教育運営委員会の委員として ILAC 長は上記科目の授業参観を行い、授業に対するコメントを通して、質保証に資する提言等を行うことになっている仕組みを構築している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>2021年度にはイオンフィナンシャルサービスグループの寄付講座による「リベラルアーツ特別実習（金融グローバルインターンシップ）」（国内外インターンシッププログラム）を新たに開設した。これは春学期に置かれている同グループの寄付講座による「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」の応用・展開の位置づけをもつものである。海外でのインターンシップを含み、キャリア教育における学生の社会的、実践的な広い視野を形成することが期待される。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・2021年度 ILAC 科目「リベラルアーツ特別実習」シラバス https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=2119958&nendo=2021&gakubu_id=%E3%83%AA%E3%83%99%E3%83%A9%E3%83%AB%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%84&gakubueng=AX&t_mode=pc</p>

2.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

2.2①学生の履修指導を適切に行っていますか。2021年度1.2①に対応

S：さらに改善することができた
<p>【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の履修指導は、学部の「履修の手引き」と全学共通仕様の Web シラバス（全文掲載）で行っている。 ・ILAC 科目の関係性や体系を把握できるようにカリキュラムマップとカリキュラムツリーを作成しており、学生が科目の履修を選択する際に活用できるようにしている。 ・全般的な履修説明は学部ガイダンスで行われている。特に、各学部の新入生ガイダンスにおいては ILAC カリキュラムについて説明する動画ファイル「ILAC と ILAC 科目ガイダンス」の周知・公開をしてもらい、新入生が大学の中での ILAC と ILAC 科目を理解するために、0群から5群までの構成や100番台から300番台までのナンバリングなどの意味を説明し、卒業所要単位や学部専門科目とのつながり方など、学生が俯瞰的な視野にたつて履修構成を考えることができるようにし、体系的、順次的な科目の履修を促している。情報科学分科会、英語分科会、保健体育分科会でも、学部執行部に依頼して学部ガイダンスに必要な事項を反映させて行ったり、その場において独自に履修説明を追加したりしている。その他、特別なガイダンスが必要な科目においては、各科目担当者が初回の授業内でのガイダンスを行っている（例；サイエンス・ラボA・B、スポーツ総合演習、English1-1）。 ・窓口での履修指導は、各学部窓口と ILAC 事務局が共同して対応している。各科目には、専任教員の科目責任者を配置し、必要に応じて、科目責任者による指導も行う。保健体育分科会では、保健体育センター窓口でも履修指導を行っている。 ・ILAC ではシラバス通りに授業運営がなされたか、また、受講生の意見や授業アンケートの結果等を踏まえて、「後シラバス」（当該学期終了後のシラバス執筆者によるシラバスチェック＝自己点検）を行っている。この「後シラバス」の実施率も調査し、ILAC 運営委員会で報告し、各分科会での実施向上を図っている。これによって学生の要望や意見を早めに自身の授業に反映することができる。 <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>ILAC では 2,700 を超える科目を開設していることから、それらの科目の体系や関係性をカリキュラムマップやカリキュラムツリーによって示しているものの、内容を把握しづらいのが課題としてある。そのため、2021年度では「ILAC カリキュラムマップ・ツリー体系化プロジェクト」を発足し、カリキュラムマップ・ツリーの問題点を洗い出し、学生が履修選択をする際に用いられるよう改善を図った。また、学生モニター制度を活用し、学生に現行のカリキュラムマップ・ツリーの活用状況や問題点、履修登録の際の参考資料・情報などについての情報収集を図った（2021年11月8日実施）。その結果、カリキュラムマップ・ツリーがあまり認知されておらず、履修登録の際に活用されていないことが明らかになるとともに、履修登録にも改善点があることが判明した。それらを踏まえ、同プロジェクトではカリキュラムマッ</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

プ・ツリーの体系化についてだけでなく、シラバスシステムの改善点など履修全般に関わる答申が示された。なお、これらの取り組みは継続的に行う必要があることから、2022年度以降も同プロジェクトの取り組みを継続する方向が確認されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第11回 ILAC 運営委員会資料（新入生向け ILAC カリキュラム紹介動画利用のご依頼）
- ・ILAC と ILAC 科目紹介・説明（動画コンテンツ <https://www.youtube.com/watch?v=6LxUr2QjHJ0>）
- ・2020年度第8回 ILAC 運営委員会資料（後シラバス入力依頼・実施状況報告）
- ・2021年度第10回 ILAC 運営委員会資料（ILAC カリキュラムマップ・ツリー体系化について（答申））
- ・2021年度第7回 ILAC 運営委員会議事録
- ・2021年度第8回 ILAC 運営委員会資料（市ヶ谷リベラルアーツセンター学生モニター）

2.2②学生の学習指導を適切に行っていますか。2021年度1.2②に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

シラバスによる指導方針を明示し、個々の教員はオフィス・アワーを設定して個別指導を行っている。また、各分科会はそれぞれ独自の学習指導体制を整えており、「基礎ゼミ」、「法政学への招待」、キャリア教育関連科目においても、それぞれを主管する組織体が独自に学習指導を行っている。

各学期期末の「学生による授業改善アンケート」の集計結果やその分析結果、各年度の「授業改善アンケート」全学集計結果報告書や卒業生アンケート調査結果、あるいは各分科会を通じて意見を聴取したオンライン授業に対する取り組み状況の調査結果などを活用し、ILAC 運営委員会で提示・説明し、意見交換して、問題点の検討を行っている。また、これらの検討内容・結果については分科会委員長から各分科会メンバーに情報共有を図っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020年度に引き続き、オンライン授業における工夫や独自の取り組み（グッドプラクティス）について各分科会を通じて意見聴取を行い、ILAC 運営委員会にて情報の共有や意見交換を行うことで、オンライン授業における学生の学習指導について検討した。

また、ILAC 運営委員会では、後シラバスの集計結果や学部1年生に対するアンケート調査結果の検討を通じて、各群の科目における学習状況や1年生の学習状況を把握し、それぞれにおける学習指導の適切性について再確認した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第2回 ILAC 運営委員会資料（2020年度秋学期「学生による授業改善アンケート」の実施結果について）
- ・2021年度第5回 ILAC 運営委員会資料（2020年度「学生による授業改善アンケート」全学集計結果報告書）
- ・2021年度第10回 ILAC 運営委員会資料（2020年度卒業生アンケート調査結果について）
- ・2021年度第10回 ILAC 運営委員会資料（2021後シラバス群・言語別問集計）
- ・2021年度第11回 ILAC 運営委員会資料（2021年度（学部）1年生アンケート調査結果について）
- ・2021年度第10回 ILAC 運営委員会議事録（2022年2月25日開催）

2.2③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。2021年度1.2③に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

シラバスに【授業外に行うべき学習活動（準備学習等）】を明示することで、学生の学習時間を確保することに努めている。この項目の記載については、年度末にすべての科目に関してシラバスチェックを行い、その指示が適正に行われていることを確認している。これに加えて、各分科会、基礎ゼミ担当学部、キャリア教育関連科目責任者、自校教育（「法政学への招待」）科目責任者が、それぞれに独自の方策をとっている。

大学設置基準に基づいた学生の授業の準備学習時間（予習・復習）を標準時間で必ずシラバスに記載することとした。シラバスの第三者確認を分科会委員長、科目責任者、執行部でチェックの責任を明確にした分担を行い、全科目の準備学習時間の記載が完全に行われているかの最終チェックを事務局と執行部が行い、100%の記載を確認している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・2021年度第1回ILAC運営委員会資料（カリキュラム・ポリシーに基づくシラバス第三者確認結果報告について）

2.2④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。2021年度1.2④に対応

S： さらに改善することができた
<p>【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2014年度シラバスから「授業の概要と方法」の欄においてPBL（課題解決型授業）・グループワーク・プレゼンテーションの有無の記入項目が追加されたことを受けて、これらの方法を積極的に導入する科目が増えてきている。 ・2017年度実施の新カリキュラムにおいて、「総合科目」内に演習形式の「教養ゼミ」を設置し（履修年次は2年生以上）、少人数によるアクティブラーニング授業として2018年度にスタートした。 ・ILACではシラバス通りに授業運営がなされたか、また、受講生の意見や授業アンケートの結果等を踏まえて、「後シラバス」（当該学期終了後のシラバス執筆者によるシラバスチェック＝自己点検）を行っている。この「後シラバス」の実施率も調査し、ILAC運営委員会で報告し、各分科会での実施向上を図っている。これによって次回からの授業・教育の質の改善が見込まれる。 分科会単位で行われている特筆すべき取り組みは、以下の通りである。 ・人文科学分科会が設置している「文章論」では、科目の開講当初より、テーマに沿った小作文執筆を受講生に課し、それに対する個別のコメントを含めた添削指導を学期内に複数回行うという形で、双方向授業を展開している。またそのうちの優れた作文をテキストとして使用し、受講生の文章を読みあうことで、高度な文章力についての認識を相互に深め合っている。 ・社会科学分科会では、科目ごとに、音楽や映像を積極的に活用したり、独自作成資料を授業支援システムで配布したりするなどして、教育効果の向上に努めている。2018年度には、囲碁を用いて戦略的思考を学ぶ教養ゼミを開講した。「法学Ⅰ・Ⅱ」では、初学者に対する法学基礎の教育の充実に向けて、①法律学の一般的・包括的内容、②日本国憲法の基礎、③国際法の基礎の3つを柱として含んだ内容構成に科目全体で取り組んでいる。 ・自然科学分科会の「サイエンス・ラボA・B」は文系キャンパスにおける貴重な理系実験科目である。当科目では、班分けすることによってグループで課題に取り組む環境を設定し、アクティブラーニングによる教育効果の向上に努めている。このほか、どの科目においても、文系学生にも分かりやすい理系の授業を心がけており、当分科会教員が参加する「自然科学センター」のサイエンス・コミュニケーション活動、「サイエンスカフェ」の催しも、文系学生に対する啓発に努めている姿勢の表れである。 ・情報学分科会では、タイピングの速度を測定するソフトウェアを用いて目標を設定し、また文書作成・表計算・プレゼンテーションなどのソフトウェアを使える能力を上げるための練習問題を用意して学生に作成したファイルを提出させるなど、教員・学生双方が学習成果を具体的に測定しやすいよう工夫を行なっている。 ・英語分科会では、習熟度別の少人数クラス編成で、学習者同士が習得言語を使った練習・交流・ディスカッション・発表など参加型の授業を行っている。また国際文化学部生を対象に、リスニングの自己学習を促すために、インターネット上の無料リスニング教材を紹介するハンドブックを学部ウェブサイトで共有し指導している。また、エッセイライティングの手引きとなるハンドブックも補助教材として使用している。 ・諸語分科会では、語学教材だけでなく、政治・文化に関する視聴覚メディア・資料を採り入れ、また、独自に編集し作成したマルチメディア教材等も用いて、外国語を通して異文化の総合的理解を促す授業を拡大する（ドイツ語）、AV資料を適宜活用しながら学生の関心に沿った授業運営を行う（スペイン語）、授業における対面授業とeラーニングを利用した授業外学習を組み合わせたブレンド型学習を逐次拡大する（中国語）、視聴覚授業内容の年次別区分を新たに実施する（フランス語）、1年次授業で統一教科書を用いリレー方式の授業運営を行なう、また授業支援システムに副教材をアップロードして授業外学習に役立てる（朝鮮語）等、言語ごとの特性と実情に合わせた多様な試みが行なわれている。なお、学生アシスタント制度「ラーニング・サポーター」を活用して、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語は専任担当教員が運営責任者となって、正課外のピア・ラーニング活動として「多言語カフェ」を運営し、留学生と当該語学履修者（学生）の協同によって学生の語学運用能力の向上に努めている。また、2020年度「ラーニング・サポーター」実施についても報告し、その活用が各分科会で決定した（2019年度第9回ILAC運営委員会）。 ・保健体育分科会では、演習科目における実習において、以下に示した課題を通じてアクティブラーニングによる課題解

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

決型の教育推進に取り組んでいる。

- 1) 学生自身の体力を把握させるための体力測定（筋力・柔軟性・敏捷性・瞬発力）および身体組成測定を教材として扱い、学生相互に協力しながら測定に取り組める環境を設定し、測定結果を個々に分析し、体力に関する問題を見出させ、今後の課題を設定させている。
- 2) 体力に関する今後の課題の解決に資する知識や方策を提供するとともに、その一端として、トレーニングセンター内の各種機材を安全かつ適切に使用するための指導を授業時間内に行うとともに、学生の将来の健康の保持増進に資する授業外に取り組むべき自己学習課題としてトレーニングセンターの活用を促し、教育効果の向上に努め、トレーニング環境の整備にも配慮している。
- 3) 卒業後の実社会において極めて重要となる他者とのコミュニケーションを自然発生的に促すための方策としてスポーツ実技を教材としたグループワークを通じてリーダーシップの発揮や問題解決などの能力の啓発に努めている。
- 4) 疾患または障がいなどを有し、基盤科目「スポーツ総合演習」の受講（前述の1～3）が困難である学生を対象とした「スポーツ総合演習（アダプテッド・コース）」を開講し、教育の質的保障に努めている。

・**基礎ゼミ**（文学部、キャリアデザイン学部等）は主体的な学びのためのアカデミック・リテラシーを修得させる少人数授業であり、プレゼンテーションやディスカッション、グループワークを積極的に採り入れたアクティブラーニング型の授業形態にしている。

・**「法政学への招待」**（自校教育）は自分の通う大学について知ることで、そこで学ぶ意義や役割を考える科目として開講された。本学の歴史や現在を扱う中で、地域連携活動や社会貢献、海外との交流にも重点を置くことで、国内的・国際的な幅広い視野を獲得できるように努めている。オムニバス形式でその都度適切な講師のキャスティングを行う一方で、常に科目責任者も参加することで、科目としての一貫性を保持している。毎回、授業の最後にクリッカーを使った振り返りを行い、学習内容を確認させている。グループワークの機会を設けて学生たちの主体的な参加を促している。とくに最終回の授業では、授業内容に基づいた大学の将来に対する提言を作成し、優秀な提言には総長が賞を与えることで大学に対する貢献の場を提供する。「法政学への招待」で得た興味関心をさらに発展できるよう、上位科目として「法政学の探究LA/LB」を開講し、体系化を図っている。

・**キャリア教育関連科目**では、独自に作成したビデオ教材を用いて、大学で学ぶことが将来の仕事にどう役立っているのかを理解させたり、グループディスカッションでテーマ設定をして意見交換をさせたりするなど、学生の参加意識を高めるようにしている。また2013年度に就業力を構成するコンピテンシーを測るために独自に開発した測定テスト（HAT）を受講者に対して継続的に実施するとともに、インターンシップの新方式として考案した、企業との提携によるビジネスコンテストへの受講生の参加など、授業の内外で動機付け・スキル取得・スキームの実践を図り、科目の持つ達成指標への到達度向上と同時に指標そのもののレベルアップに役立っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの授業でリアルタイム双方向授業（Zoomなど）やオンデマンド（資料配信型）、フルオンデマンドなどオンライン授業を積極的に活用した。
- ・教育開発支援機構のプランに基づき、2019年度に社会（企業、市民活動団体等）と連携した課題解決型フィールドワーク科目 type B を0群に設置した。2021年度においてはILACからこの科目に応募があり、2科目が採択・実施となった。なお、2022年度には4科目が開講予定である。
- ・2021年度においても「ラーニング・サポーター」「授業支援アシスタント制度」実施について報告し、その活用が各分科会で決定した。
- ・2021年度においても千代田区キャンパスコンソーシアムにILACから多くの科目を拠出した。
- ・2021年度には「リベラルアーツ特別実習（金融グローバルインターンシップ）」を新規に開講した。本科目はイオンフィナンシャルサービスグループの寄付講座であり、授業の中では同グループのノウハウや人員、施設を活用したインターンシップが実施される。そのような取り組みを通じて、本学、とりわけILACの科目では数少ない実践的かつ応用的な内容の授業が展開された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第8回ILAC運営委員会資料（シラバス作成・後シラバス入力依頼について）
- ・2021年度第8回ILAC運営委員会資料（2022年度課題解決型フィールドワーク for SDGs（機構公募型）の採択および募集期間の延長について）
- ・2021年度第9回ILAC運営委員会資料（2022年度学生アシスタント制度「授業支援アシスタント」の実施について）
- ・2021年度第9回ILAC運営委員会資料（2022年度学生アシスタント制度「ラーニング・サポーター」の実施について）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・2021年度 ILAC 科目「リベラルアーツ特別実習」シラバス
(https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=2119958&nendo=2021&gakubu_id=%E3%83%AA%E3%83%99%E3%83%A9%E3%83%AB%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%84&gakubueng=AX&t_mode=pc)
- ・ILAC 科目シラバス (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/head.php?gakubueng=AX&t_mode=sp)

2.2⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。2021年度

1.2⑤に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※どのような配慮が行われているかを記入。

- ・必修語学は一クラスの定員を設定し、少人数制授業の効果が出るよう配慮している。
- ・演習・実験科目や、ナンバリング300番台（高度な教養）の総合科目に関しても、定員制を採用する科目が多く、適正な受講者数を実現している。
- ・一般の講義科目については、過多（大規模）受講者授業に対してその適正化を図るため、学習権に配慮しながら、議論と検討を重ね、2019年度の承認に基づき、2020年度4月より事前抽選制を導入した。前年度の履修者が550人を超えた科目については、翌年度は事前抽選対象科目とし、さらに原則300人以上550人以下（300人未満も可）を目安に各分科会で必要と認めた科目を抽選対象科目とするものである。この事前登録による抽選システム導入によっていわゆる大規模授業における一授業当たりの履修者数（学生数）の適正化が担保できるようになった。
- ・人間環境学部とキャリアデザイン学部の英語必修クラス授業の定員が、2018年度より、従来の28名以内から24名以内に改善され、市ヶ谷地区6学部平等の英語の授業環境が実現した。
- ・2019年度より諸外国語の必修クラス授業について、入学者の希望に、より即したクラス配分の改善案を執行部から提案し、承認を得た。
- ・大学の授業スリム化方針において、「例外科目」ルール作成を2018年度に引き続き行い、カテゴリーとして例外科目を策定することがあらためて承認された。それに基づいて、カテゴリー「文理融合科目」として「サイエンス・ラボA・B」をあらたに「例外科目」として承認した。その後も各分科会で、最新の各科目履修者数のデータ等をもとに、現場の切実な課題として、改善策も含めた対応に継続的に努めている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2020年度と同様に、2021年度においても大規模授業には抽選制を適用した。大規模授業における事前登録抽選制の「履修の手引き」への記載、Web、HP等を通して抽選制導入とその方式について学生への周知を行った。
- ・履修者数が250名を超える大規模授業においては、多人数授業であっても教育効果が得られることを勘案し、資料配布型やオンデマンド型の授業形態を採用した。なお、2022年度においても同様の方針の下、履修者数250名を超える授業においては資料配布型・オンデマンド型の授業形態を、また、履修者数125名～249名規模の授業のうち100番台の授業においても同型の授業形態を行うことがILAC運営委員会にて承認された。
- ・各分科会において、新カリキュラム施行に伴う履修者数動向の分析を行い、2021年度第9回ILAC運営委員会にて情報共有を行うとともに、新カリキュラムの効果の検証を行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第7回ILAC運営委員会資料（2022年度授業形態に関するILAC基本方針について）
- ・2021年度第8回ILAC運営委員会資料（2022年度「大人数授業」抽選実施対象授業一覧）
- ・2021年度第9回ILAC運営委員会議事録

2.2⑥シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。2018年度2.2⑥に対応

はい

【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。

- ・2013年度の事務局による所定フォーマットのチェック開始を経て、2014年度からは、新任教員の記述については各分科会委員長が内容をチェックすることとしている。0群「基礎ゼミ」（文学部）、3群「サイエンス・ラボA・B」、5群「スポーツ総合演習」「法政学への招待」（自校教育科目）・キャリア教育関連科目では、各運営セクションや担当者全員でシラバスの確認・検証を行っている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・すべての科目について、科目責任者を中心にしてシラバスの第三者確認を実施し、必要に応じて年度末に担当者にシラバスの修正依頼をし、適正化に努めている。とりわけ、第三者確認の際に報告の多い項目（「授業の進め方と方法」における課題等に対するフィードバック方法の記載や「授業計画」の記載内容、「授業時間外の学習」における具体的な時間数の記載、「成績評価の方法と基準」における評価方法の配分の記載の点について重点的に確認・検証を行っている。
- ・2021年度のシラバス第三者確認においては、「授業時間外の学習」や「成績評価の方法と基準」などの項目における英語表記や、授業形態について重点的に確認・検証がなされた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・シラバス第三者確認依頼（2017年度第9回運営委員会資料8）
- ・2021年度第9回ILAC運営委員会資料（カリキュラム・ポリシーに基づくシラバス内容の第三者確認の実施について（依頼））

2.2⑦授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。2018年度2.2⑦に対応

はい

【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。

- ・担当教員に、新年度シラバス入力時に、当該年度の授業シラバスに追加した「後シラバス」項目の入力を依頼し、シラバス各項目の達成度の自己評価を数値化して測定している。
- ・後シラバス入力に伴うシラバス各項目の達成度の集計結果はILAC運営委員会にて情報共有し、ILAC全体ならびに各群の動向を検証するとともに、各授業担当者による自由記述の内容を確認している。
- ・英語分科会では、法学部・文学部・経営学部の1年次必修英語科目担当者を対象に、後シラバスの代わりに、科目共通の学習項目の実施状況をチェックするためのWebアンケートを実施し、その分析結果を、担当者全員に宛てたメールにてフィードバックしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・後シラバス依頼文書と入力フォーマット（2017年度第8回運営委員会資料19）
- ・2021年度第10回ILAC運営委員会資料（2021後シラバス群・言語別問集計、2021後シラバス自由記述欄一覧）
- ・「2021年度質保証アンケート 結果分析」春学期分・秋学期分（2021年度第3回・第7回英語分科会資料）

2.2⑧通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果についても教えてください。2021年度

1.2⑥に対応

※取り組みの概要を記入。

ILACでは各分科会を通じて、COVID-19に対応するオンライン授業における工夫や独自の効果的な取り組み（グッドプラクティス）、課題等について意見聴取を行った。それらの意見はILAC運営委員会にて情報共有・検証が行われた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第10回ILAC運営委員会議事録

2.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

2.3①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。2021年度1.3①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

【確認体制及び方法】※箇条書きで記入。

シラバスの「成績評価基準」を明確化し、学生に公開することで公平性を担保している。成績評価規準が曖昧なシラバス原稿については、オンラインでのシステムがリニューアルされたことにもない、分科会委員長、科目責任者、執行部による第三者確認を行い、コメントをつけて本人への修正依頼が自動メール配信で行われ、確認完了までそれを繰り返すことによって、100%のチェックを完了した。その際に成績評価基準の%や数字表示による記載をすべての科目で行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

2021年度のシラバス第三者確認においては、シラバスにおける「成績評価の方法と基準」の項目が具体的に記載されているのか重点的に確認・検証するとともに、英語表記の有無についても確認を行った。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・2021年度第9回ILAC運営委員会資料(カリキュラム・ポリシーに基づくシラバス内容の第三者確認の実施について(依頼))

2.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

2.4①成績分布の状況を把握していますか。2021年度1.4①に対応

はい
【データの把握主体・把握方法、データの種類等】※箇条書きで記入。
<ul style="list-style-type: none"> ILAC全体としては、セメスター毎のGPCA集計の結果を報告し、運営委員会を通じて分科会・学部で共有することで、横断的な成績評価の適切性を検証している。 自然科学分科会におけるオムニバス形式授業の「サイエンス・ラボA・B」では、全体的な成績の分布傾向を把握しており、授業間でGPCAに偏りがある時には兼任講師も含めた担当教員全体に周知されている。 諸語分科会の一部の言語では、統一試験を実施することによって市ヶ谷全体の成績分布を把握している。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・2021年度第8回ILAC運営委員会資料(2021年度春学期GPCA集計結果)

2.4②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。2021年度1.4②

に対応

A: 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。
<p>ILAC科目は、教養教育カリキュラムとして幅広い分野に亘り、豊かな多様性を特徴とするため、ILAC全体(運営委員会)としては、FD授業評価アンケートや卒業生・新入生アンケート、GPCA分布等に関するILACカリキュラム全体の結果を成果指標として利用している。</p> <p>また、2019年度には教養教育の全体的な学習成果の測定方針として、ILACの「アセスメント・ポリシー」を策定し、これをILAC関連6学部を提供し、学部「アセスメント・ポリシー」に適宜組み込む形式で指標の設定を明示的に行った。さらに、以下に例示するような各分野(分科会)の特性に応じた分科会単位の取り組みを行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報学分科会では、タイピングの速度を測定するソフトウェアを成果の指標に用いて、目標の入力速度を達成するように指導している。文書作成・表計算・プレゼンテーションなどのソフトウェアを使える能力の評価は、作成すべき文書・表・発表資料などを練習問題として提示し、学生に作成したファイルを提出させて成果の指標とし、それを3~4段階で評価するようにしている。 英語分科会では、十分な検討を重ねてその信頼性が担保できる外部試験を活用し、さまざまな科目において習熟度別クラス編成を行い、また学生の英語運用能力の把握に努めている。また、1年次の必修クラス授業English1で学生に書いてもらう「大学での英語学習計画」は、学生個々の卒業後の進路希望や4年間で身につける英語能力の具体的な目標、および1年間の目標(春学期初め)、そして学期末ごとに自らの学習成果を記述するシートであり、学習目標の設定や学びの省察を促す。 諸外国語分科会(略称: 諸語分科会)では、言語ごとに工夫が見られる。ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・スペイン語では、毎回あるいは回数ごとの成果確認の指標として小テストが実施されている。また中国語では、現在促進しているブレンド型授業(教室での対面授業+授業外のeラーニング)の成果測定のために、授業外学習の履行を(web上で)チェックする体制をとっている。 <p>諸語分科会全体として当然ながら、諸語をコミュニケーション言語とする諸語圏への留学者数や、各言語に関する検定試験の受験者数とその成績なども、大切な指標の一つとなっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> キャリア教育関連科目では、毎回の講義でのリアクションペーパーとともに、HAT(1.2④参照)の結果を用いて学生の指導を行っている。リアクションペーパーについては、毎回成績をつけ、定期試験の成績と総合して、最終の成績評

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

<p>価としている。また、HATについては、予算の制約もあって、全キャリア関連科目ではなく、一部の科目の受講生に実施している。</p> <p>その結果と就職先の関係を分析すると、HAT で高い点数を獲得した学生は、就職活動においても満足いく結果になっていることが確認できた。</p> <p>上記は分科会単位の取り組み例であるが、授業担当者個々は、基本的に試験やレポートによる成績評価に基づき学習成果を測定しているほか、毎回の成果をリアクションペーパーにより調べている教員も多い。</p>
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>・2021 年度においても、シラバスに「課題とそのフィードバック方法」についての記載を全科目において行い、ILAC の科目に応じて、科目責任者、分科会委員長、ILAC 執行部で第3者確認を行い、100%の記載を確認した。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・2021 年度第9回 ILAC 運営委員会資料(カリキュラム・ポリシーに基づくシラバス内容の第三者確認の実施について(依頼))</p>

2.4③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。2021 年度 1.4③に対応

<p>A : 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p> <p>ILAC 全体（運営委員会）では、FD 授業改善アンケートの結果のほか、卒業生アンケートや新入生アンケートの満足度や「授業で身についたこと」（卒業生）についての集計結果等を運営委員会にて資料として示し、執行部の分析報告のち意見交換を行い、情報を共有している。</p> <p>分科会単位の取り組みについては前項 1.4②に例示した通りであり、運用は各分科会・セクションに一任されているが、個々の取り組みの報告は内部質保証委員会のチェックを経て運営委員会で紹介され、相互啓発を期して情報共有される。</p>
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>特になし</p>

2.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

2.5①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2021 年度 1.5①に対応

<p>A : 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※検身体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>・2017 年度の ILAC 内部質保証委員会にて、新カリキュラムの体系性（履修の順次性）の成果を測るための新規の指標を導入する必要が提起され、具体的なアイデアとして6学部の学生の成績サンプル調査を2018年度に試行した。</p> <p>・授業改善アンケートの項目のなかで主として「平均予習・復習時間」「授業で身についたこと」の結果について、運営委員会において審議の後、学部・分科会で共有することで、検証を行っている。</p> <p>・「法政学への招待」（自校教育）およびキャリア教育関連科目では、定期的に開催されるそれぞれの運営委員会で教育成果の検証をおこなっている。</p> <p>・2019 年度 12 月に、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「市ヶ谷教養教育（ILAC）のカリキュラム内容、学修方法について」をテーマにしたモニタリングを行なった。その際、まず事前アンケートを参加学生全員に回答してもらい、その結果を執行部で問題点・テーマ別にクロス集計し、そのうえでモニタリングに臨んだ。また、モニタリングの結果を「教育開発支援機構 2019 年度学生モニター制度実施報告（ILAC 検討資料）」としてまとめ、資料を2019年度第11回運営委員会にて配布・報告した。また、この資料をもとに、「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートにまとめ、ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクトを発足させた。このモニタリングによって学生の視点からみた新カリキュラムの課題点・問題点、科目の受講・登録の際の利便性、履修指導や科目への要望等を認識することができた。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度には、新カリキュラムにおける学生の科目の履修状況に対する分析を通して、新カリキュラムの順次性と体系的成果を測定し、また課題点を発見することを目的とした年次別履修状況サンプル調査を行った。本調査は、年次別、GPA スコア別の単位履修状況、体系的（順次性）を意識した履修計画の有無、履修した科目の成績、さらに所要単位以上の履修状況にも着目することによって、総合科目・教養ゼミ、選択科目等に対する学生の興味・関心ある分野等を調査するために、ILAC 参加 6 学部の学生から、計 48 名を抽出して行うものであるが、新カリキュラムの成果や課題点の抽出も検証している。この検証結果を「ILAC 科目（旧市ヶ谷基礎科目）年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」レポートにまとめ、ILAC 運営委員会に提示し、説明・検討を加え、さらに「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートにまとめ、ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクトのひとつの柱とした。 ・「アセスメント・ポリシー（「学習成果の把握に関する」方針に基づく特色ある取り組み—ILAC(市ヶ谷リベラルアーツセンター)の取り組み例) 2019 年度第 2 回学部自己点検懇談会(発表型) 2020 年 2 月 27 日」PowerPoint ファイル(新型コロナウイルスによってファイルによる閲覧形式となった。URL : https://dnet.hosei.ac.jp/cgi-bin/dneo/z.cgi?lis9hqmx0r1o (3 月 3 日大学評価室発【大学評価室】「2019 年度第 2 回自己点検発表資料の共有について」) および 2019 年度第 9 回運営委員会資料 7) ・ILAC を構成する 7 分科会に（諸語分科会ではドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、朝鮮語、ロシア語、日本語の各言語部会に）ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について、現状、現在の/今後の対応策、それによって見込まれる展望等について検討を依頼し、各分科会はその検討結果を報告書（「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」全部で 14 の報告書）にまとめ、運営委員会にて提示・説明・情報共有を行った。これに基づいて 2020 年度から新カリキュラムの多岐にわたる改善、構造的なリニューアルを行うことにしている。また、分科会と ILAC がどのように取り組むかを分科会別に示した一覧を「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートに編入し、ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクトの基礎資料とした。 ・「キャリアデザイン入門」については同科目担当者で「キャリアデザイン入門 勉強会」を開き、授業に関する情報共有、課題点の発見・指摘、また改善を行っている。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
・2021 年度においては、新カリキュラムの構造的な改善を継続的に行う「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」の成果を分科会ごとで検証し、それが履修動向にどのように反映してきたのか検討した。その検討結果は ILAC 運営委員会にて情報共有がなされた。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・2021 年度第 9 回 ILAC 運営委員会議事録

2.5②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。2021 年度 1.5②に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
【利用方法】※箇条書きで記入。
<p>前年度の授業改善アンケートの各設問の結果について、運営委員会において分析・考察し、分科会・学部と情報共有を行っている。</p> <p>各教員にはシラバス入力項目として「学生による授業改善アンケートからの気づき」を設定し、授業改善アンケートに基づく改善内容の公開を義務づけている。ただし「法政学への招待」（自校教育）はオムニバス形式であり、平準化して書くことが難しいと思われるため、既成の授業改善アンケートは実施していない。その代わりに、リアクションペーパーを毎回書かせてフィードバックしているほか、学期末試験の際に独自アンケートを実施し、それらを集計・分析して受講学生の現状把握や授業の改善に活用している。そうした受講生の声をまとめて、大学の WEB 上で紹介している。</p>
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・2021 年度第 5 回 ILAC 運営委員会資料 (2020 年度「学生による授業改善アンケート」全学集計結果報告書) ・ILAC 科目シラバス (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/head.php?gakubueng=AX&t_mode=sp)

(2) 長所・特色

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<ul style="list-style-type: none"> ILAC は分野が人文、社会、自然科学、情報処理、外国語、保健体育と多様であり、それらが基本的に関連 6 学部の学生に開かれている。また 0 群という先端的、特徴的な科目群を持ち、そのなかには自校教育である「法政学」、初年次教育またリメディアルの要素も持つ「基礎ゼミ」「文章論」「情報処理演習」などがあるが、2019 年度には新たに「課題解決型フィールドワーク for SDGs」が設置された。また、2020 年度にはイオンフィナンシャルサービスグループと共同で行う「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」を、2021 年度には「リベラルアーツ特別実習（金融グローバルインターンシップ）」を新たに開講し、本学、とりわけ ILAC の科目では数少ない実践的かつ応用的な内容の授業が展開されるようになった。 ILAC の多様な科目群において、学修成果の把握は科目担当者ごと、部会、分科会単位で厳密に行われており、また 2019 年度に作成した ILAC の「アセスメント・ポリシー」を関連 6 学部に提供し、学習成果の把握を客観的なものにしていく。 ILAC 全体としては、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「市ヶ谷教養教育（ILAC）とオンライン授業」をテーマにしたモニタリング、7 分科会が調査、検討してまとめた「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」レポートから学修成果を俯瞰的に概観でき、新カリキュラムの順次性と体系性の成果を測定し、また課題点を発見できる一次資料を構築できたことの意味は大きく、今後も継続したい。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>2020 年度から新カリキュラムの検証を行っているが（「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」）、そうした俯瞰的な検証をまた、分科会、部会、科目担当者にフィードバックして、科目/科目群特性に応じて、様々な手法を用いた個別の学習成果の把握・測定を行うというサイクルを継続して行うことが重要かつ必要である。また、オンライン授業という新しい授業形態をはからずも全学的に利用することになり、今後はそれがいわば普遍的でファンダメンタルな授業形態として定着してゆくことを鑑みれば、「対面授業かオンライン授業か」、「対面授業とオンライン授業のどちらがいいのか」という二項対立の図式ではなく、それぞれの特質やメリット・デメリットを検証していき、有効に活用し、オンライン授業という形態でいかに授業目的を効率的に達成するか、その方法や検証方法を考えていくことが課題となる。なお、2021 年度には ILAC 全体ならびに分科会単位でオンライン授業における工夫や独自の有効な取り組み（グッドプラクティス）、課題などを検証する機会を設け、上記課題への対応を図った。しかし、科目ごとの個別対応に留まる部分が多く、組織全体としての効果的な対応には至っておらず、今後、さらなる改善が必要である。</p> <p>また、教育方法の検証する手段の一つとして後シラバスの導入を導入している。その結果は ILAC 運営委員会にて検証しており、後シラバスの有効性を確認している。しかし、後シラバスの回答授業率は 12.8%に留まっており、ILAC 全体で活用できているとは言い難い。今後、後シラバスの回答授業率を上げ、より効果的に活用できる仕組みを考えていくことが課題である。</p>

【教育課程・学習成果の評価】

<p><①教育課程・教育内容に関すること (2.1) ></p> <p>ILAC では、0 群から 5 群の科目群までそれぞれバランスよく履修できる科目を配置し、多岐の分野に亘る幅広い教養を身につけることができるようにカリキュラムを編成しており、教育課程編成としては適切である。2021 年度は、イオンフィナンシャルサービスグループと共同で科目運営をする「リベラルアーツ特別実習（金融グローバルインターンシップ）」（0 群設置）を新設したものの COVID-19 の影響により、秋学期の期間中に予定されていた国内外のインターンシップはオンラインでの実施となったとのことであるが、新しい試みとして評価したい。また、全学共通のプログラムである「ダイバーシティ・サティフィケート」プログラムに提供する科目として、「異文化コミュニケーション論 B」「比較文化 A」「Intercultural Communication B/C/D」「教養ゼミ I・II（現代社会の人権問題 A・B）」「教養ゼミ I・II（在日朝鮮人の歴史 A・B）」を新規に設置したが、いずれの科目も幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する</p>
--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

教育課程のさらなる充実へ寄与するものであり評価できる。今後も多くの学生が受講を希望するような魅力的なプログラムの開設を期待したい。

ILAC では、2021 年度から各学部での新入生ガイダンスにおいて ILAC カリキュラムの説明を行っている。これによって、新入生が大学の中での ILAC と ILAC 科目の群やナンバリングなどの構成を理解し、体系的、順次的な科目の履修を促すことになり、適切である。また、動画を YouTube にて公開していることは、コロナ禍の中で通学できない学生・留学生にとっての配慮として評価できる。

実践的なキャリア支援教育科目としては、キャリア教育運営委員会（ILAC センター長が委員として参加）が運営する「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」を 0 群に配置しているが、ディスカッションやグループワークなどを通して課題発見・問題解決等の能力を養う授業が多いことから、授業アンケートにおける学生の評価も毎年高いとのことあり評価できる。

<②教育方法に関すること (2.2) >

ILAC では、履修指導は、各学部の「履修の手引き」と全学共通仕様の Web シラバスで行われており適切である。2021 年度は「ILAC カリキュラムマップ・ツリー体系化プロジェクト」を発足し、カリキュラムマップ・ツリーの問題点を洗い出し、学生が履修選択をする際に用いられるよう改善を図るとともに、学生モニター制度を活用し、学生に現行のカリキュラムマップ・ツリーの活用状況や問題点、履修登録する際の参考資料・情報などについての情報収集を図った点は評価できる。次年度以降も同プロジェクトの取り組みの継続を期待したい。

学習指導は、シラバスによる指導指針が明示し、個々の教員はオフィス・アワーを設定して個別指導を行っている。また、各分科会、キャリア教育関連科目においても、それぞれ独自の学習指導体制を整えており、履修指導は適切に行われていると評価できる。

学生の学習時間を確保するため、シラバスに「授業外に行うべき学習活動」を明示しており適切である。

ILAC では、教育上の目的を達成するために、各分科会等がそれぞれ独自の取り組みを行っている。教育開発支援機構のプランに基づき、2021 年度は、社会（企業、市民活動団体等）と連携した課題解決型フィールドワーク科目 type B に ILAC から 2 科目が採択され実施された。2022 年度は 4 科目が開講予定とのことであり、同科目の積極的な活用は評価できる。今後の利用増加を期待したい。

各授業あたりの学生数については、必修語学は少人数制授業、演習・実験科目やナンバリング 300 番台（高度な教養）の総合科目においても定員制を採用しており、適切である。大規模受講者授業については、その適正化を図るために、事前抽選制を導入し、一授業あたりの履修者数（学生数）の適正化が担保できるようにしていることおよび同一科目で通常授業が履修できるようにし、前年度抽選から漏れた学生については、次年度優先的に履修できるなど配慮していることは評価できる。履修者数が 250 名を超える大規模授業においては、多人数授業であっても教育効果が得られることを勘案し、資料配布型やオンデマンド型の授業形態を採用したとのことであるが、学生の反応等について授業アンケート等を通じて今後検証することが期待される。シラバスの作成とシラバスに沿った授業の実施に関するチェックの体制は整えられていると判断される。

なお、ILAC では、COVID-19 への対応・対策として、各分科会を通じてオンライン授業における工夫や独自の効果的な取り組み（グッドプラクティス）、課題等について意見聴取を行い、それらの意見は ILAC 運営委員会で情報共有・検証が行われており評価できる。

<③学習成果・教育改善に関すること (2.3~2.5) >

ILAC では、シラバスの「成績評価基準」を明確化し、学生に公開することで公平性を担保しているなど、成績評価と単位認定は、適切な評価が行われている

ILAC では、各分野（分科会）の特性に応じた分科会単位の取り組みを行っており適切である。また、FD 授業改善アンケートの結果のほか、卒業生アンケートや新入生アンケートの満足度や「授業で身についたこと」（卒業生）についての集計結果等を運営委員会において資料として示し、執行部の分析報告ののち意見交換を行い、情報を共有している。分科会では、各分科会・セクションごとに、その特性になった運用がなされているが、個々の取り組みの報告は内部質保証委員会のチェックを経て運営委員会で紹介され、相互啓発を期して情報共有されており適切である。

学習成果については、定期的に検証を行っているほか、新カリキュラムの構造的な改善を継続的に行う「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」の成果を分科会ごとで検証し、それが履修動向にどのように反映してきたのか検討し、その検討結果を ILAC 運営委員会で情報共有するなど改善・向上に向けた積極的な取り組みは評価できる。

授業改善アンケートについては、その結果を運営委員会において分析・考察し、分科会・学部と情報共有を行っている。各教員にはシラバス入力項目として「学生による授業改善アンケートからの気づき」を設定し、授業改善アンケートに基

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

づく改善内容の公開を義務づけており、適切である。

3 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

3.1①組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。2018年度3.1①に対応

【リベラルアーツセンター執行部の構成、分科会の名称・役割・責任体制】※箇条書きで記入。

【市ヶ谷リベラルアーツセンター執行部の構成、分科会の名称・役割・責任体制】※箇条書きで記入。

- ・執行部は正副市ヶ谷リベラルアーツセンター長並びに事務主任・学務部課長により構成されている。
- ・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）運営委員会は、執行部と、カリキュラムの管理・運営の実務を担う下記の7分科会委員長のほか、各学部からの代表（教授会主任）、学部長会議からの代表者（学部長1名）、そして教育開発支援機構構長をメンバーとして運営されている。ILACのカリキュラムは市ヶ谷6学部共通プログラムであるため、分野別の実務責任者である各分科会委員長だけでなく、学部代表者の出席も不可欠であり、各教授会における審議・承認が必要な事項については、その都度教授会に持ち帰ってもらっている。ILAC執行部や分科会からばかりではなく、学部から新規提案がある場合もある。
- ・科目の分野に応じて以下の7つの「分科会」を設け、それぞれに分科会委員長を置き、さらに科目ごとに「科目責任者」を置いている。7つの分科会とは、人文科学分科会（1群科目を主管）・社会科学分科会（2群科目を主管）・自然科学分科会（3群科目を主管）・情報学分科会（0群の情報学関連科目を主管）・英語分科会（4群の英語科目を主管）・諸外国語分科会（4群の諸外国語科目—ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・朝鮮語・日本語—を主管）・保健体育分科会（5群科目を主管）である。
- ・0群のキャリア教育関連科目と自校教育科目（「法政学への招待」等）については、それぞれ「キャリア教育運営委員会」（ILACセンター長も委員として参加）、「法政学運営委員会」によって運営される。また「基礎ゼミ」については、該当学部の教授会主任が科目責任者を務めている。
- ・さらに分科会、学部によって、以下のような責任体制を整えている。
 - ・自然科学分科会では「サイエンス・ラボ運営委員会」を設置している。
 - ・英語分科会では兼任教員との連絡を担当する「ゾーン担当者」、学部との連携を担当する「学部担当者」、英語（ニア）ネイティブ兼任教員との連絡を担当する「ネイティブ担当」、さらに「時間割担当」、「質保証委員会」、「カリキュラム・モニター委員会」等が設置されている。
 - ・文学部では学科ごとに「基礎ゼミ」の質保証活動を行なっている。
 - ・経営学部では「教養教育担当者会議」「英語教育担当者会議」が設置されている。
 - ・国際文化学部では、「英語科目改革委員会」を設置し、ILAC科目を含む英語科目について扱っている。
 - ・人間環境学部では、カリキュラム委員会の中に、必要に応じてILAC関連の小委員会が設けられている。

【明示方法】※箇条書きで記入。

- ・年度末（3月）のILAC運営委員会に、委員の交代がある場合は後任の委員（次期分科会委員長、次期教授会主任）にも出席を求め、新旧委員間で引き継ぎを行うことが慣行となっている。
- ・年度初めの運営委員会でILACの規程・内規集を配布し、新委員に確認を求めている。
- ・年度後半の運営委員会で、各分科会に来年度の各科目責任者の選出を依頼し、運営委員会で一覧表を示して確定している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・市ヶ谷リベラルアーツセンター規程集（規程、施行細則（内規）等）
- ・2021年度第9回ILAC運営委員会資料（2022年度運営委員会委員選出一覧・2022年度科目責任者一覧）

3.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

3.2①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。2018年度3.2①に対応

はい

※リベラルアーツセンターの提供するカリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

カリキュラムに則った毎年の時間割編成（兼任講師の手配も含む担当者とコマ数の確定、科目単位でのきめ細かなコマ数の調整や新規開設、名称変更等）を中心としたルーティン業務は、「分科会」組織（人文・社会・自然・情報・英語・諸語・保健体育）の主務である。各分科会のコアメンバーは、各学部に分属している「別表2 教員」（教養教育主担当教員）であり、教養部時代からの職掌を基本的に継いで、自ら教養教育科目の授業を担当し、6学部共通の教養教育カリキュラムの管理・運営の実務も担う。これに各学部の「別表1 教員」も可能な範囲で協力して、分科会業務をおこなっている。また、2021年度においては「別表1 教員」もILAC執行部を務めている。

教養部解体後（＝各学部への分属後）も、教養教育授業担当およびカリキュラムの管理・運営を責務とする「別表2 教員」の後任が安定的に確保されるよう、専任人事に関する決まり事を規程・内規に定め、学部の専門教育課程の観点からの新規採用に偏らないよう、教養教育主担当者としてふさわしい教員を確保している。そして専任教員の教養教育授業担当ノルマも、原則的な申し合わせ事項として内規に定めている。そのノルマを各学部・別表2 教員が遵守することに努めてきた結果、教養部なきあとも（2003年度～）、市ヶ谷地区の教養教育は「空洞化」することなく、むしろカリキュラムとして教養部時代よりも漸進しているといえる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・市ヶ谷リベラルアーツセンター規程集（規程、施行細則（内規）等）

3.3 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

3.3①センター内のFD活動は適切に行なわれていますか。2021年度2.1①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・授業改善アンケートを分野別・言語別・学部別等に集計し、その集計結果をFDの素材として各分科会・学部で共有してきた。
- ・3種類の授業参観（相互授業参観、新人研修としての授業参観、ビデオカメラを用いたセルフ授業参観）を設定し、各分科会・学部の状況に合わせた形式で実施している。また、各分科会で専任・兼任講師合同の「FD懇談会」も開催している。
- ・センター内に内部質保証委員会を設置し、質保証についての検討を適宜行っている

【2021年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・2021年度内部質保証委員会資料のうち、54頁以降のFD授業参観実施状況報告集（54～63頁）参照

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2020年度に完成年度を迎えた新カリキュラムについての検証を行った。具体的は、分科会ごとに履修動向をモニタリングし、その結果ならびに要因分析の結果をILAC運営委員会にて情報共有し、検証を行った。
- ・オンライン授業における工夫や効果的な取り組み（グッドプラクティス）、課題等についても各分科会にて意見聴取を行い、それらをILAC運営委員会にて情報共有を行った。また、ILAC運営委員会では後シラバスの評価結果についても検証し、オンライン授業の実施に対する教員の自己評価について分析した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度内部質保証委員会資料」（2022年3月25日実施）
- ・2022年度第1回ILAC運営委員会資料（2021年度内部質保証委員会議事メモ）

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

市ヶ谷関連6学部の教養教育の、セメスター単位で2,700コマ超の授業を管理運営する学部間協働の運営組織として、現在の制度、枠組み、組織体制のスキームの中ではカリキュラム設計・運営、授業管理、組織運営等十分有効に機能しているといえる。

これまで専門教育と教養教育がそれぞれ独自にカリキュラム設計や科目担当をしていたが、2020年度以降、ILAC運営

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

委員である ILAC 関連 6 学部の教授会主任と ILAC 執行部の連携会議を設置することによって、学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員と共同で、教養教育の科目を担当し、またカリキュラム設計自体をすり合わせて行うといった協働体制の第一歩が築けた。この連携会議では、学部側と ILAC との意見交換や要望、提案が自由に行われ、まずは、上記の連携会議での意見に基づいて「学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合の手順」を策定し、内規として承認された。これによって学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合、また逆に ILAC 分科会が学部専門科目担当教員に科目担当をお願いする場合の両方の手順が明示化されたが、これは既存科目だけではなく、新設科目を共同で考えていくことも可能であるので、理想的にはカリキュラムの共同制作ということも可能になる。いずれにせよ、ILAC と学部の協働が活発となることが期待される。

また、ILAC 執行部会議、ILAC での様々な次元での対応においては学部のそれに比して事務課長・事務主任を始めとする事務局の貢献は特筆されてよい。事務的な処理にとどまらず、さまざまな調査・統計、企画立案、施策改善・対応策、施策実施後の将来展望などをともに構築していくことによって、市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）は最大限のパフォーマンスを発揮し得ているといえる。こうした観点から事務局が果たす役割は教員・職員の協働参画のモデルケースといえる。

（3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

「教養教育」の重視は大学の認識であり、いわゆる別表 1・2 教員を問わず、各学部の専門教育課程と ILAC 科目のカリキュラムとの垣根をこえて俯瞰する柔軟な視野が求められる。専門教育と教養教育がそれぞれ独自にカリキュラム設計や科目担当をしている限界を乗り越えるために、上記「(2) 長所・特色」に記したように、ILAC 関連 6 学部の教授会主任と ILAC 執行部の連携会議を設置し、「学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合の手順」を策定し、内規としたが、協働の進化のためには、学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員との科目担当だけではなく、カリキュラム設計面での協働体制が今後は提案・実行されてゆく必要がある。そのためには、ILAC 関連 6 学部の教授会主任と各分科会委員長の協議の場も必要であることから、2022 年度以降は適宜意見交換会を開催する予定である。

また、2019 年度に ILAC の着実な運営のために「センター長選出方法の一部改正について」の提案を行い、承認された。そこでは「将来的に、学部持ち回り（別表 1・2 を問わない）による選出方法も考慮に入れて、学部専門教員の市ヶ谷教養教育へのコミットを促進する施策を同時に進める。」という文言を入れることによって、こうした協力関係、相互浸透を作り上げていく協働体制を意識化している。こうした土壌のもとに、2021 年度からは、別表 1 教員が初めて ILAC 執行部となり、学部専門科目教員と ILAC 科目担当教員との協働体制のひとつの具現化と評価できよう。今後、各学部と ILAC との連携をさらに強固にするためには新たな仕組みを設けることが必要であると同時に、各学部や各分科会にて ILAC を取り巻く状況が異なることを考慮しつつ、規程等の見直しなど ILAC 科目の運用を安定的かつ弾力的に行える制度の改善が課題として挙げられる。

なお、市ヶ谷コミュニティ連携会議に市ヶ谷地区の 8 学部長とともに、ILAC センター長が参加し、学部横断的なカリキュラム「ダイバーシティ・サティフィケート」プログラムの成立に至った（ILAC から科目提供）こともそうした協働のひとつと捉えられるし、教育開発支援機構のプランに基づき、社会（企業、市民活動団体等）との連携を目指し、ILAC の 0 群に設置した「課題解決型フィールドワーク科目 type B」には、2022 年度も ILAC から 4 科目を開講する。これらの科目は ILAC 関連 6 学部に限らず、多摩キャンパスの学部を含めた全学部からの学生参加である。今後はこうした学部横断的なプログラムへの積極的な科目提供や教員参加が課題となる。

【教員・教員組織の評価】

ILAC では、教育開発支援機構長、正副センター長、事務主任、学部事務課長が執行部を構成している。ILAC 運営委員会は、執行部、7 分科会の委員長、各学部の教授会主任、各学部長で構成され、運営されている。また、各分科会では、科目ごとに責任者が配置されている。カリキュラムに関しては全体を運営委員会が、分野については各分科会が担当し、役割分担と責任の所在は明確になっており、評価できる。

FD 活動に関しては、授業改善アンケート、3 種類の授業参観、内部質保証委員会を通じて行われており、適切である。

「学部専門科目担当教員が ILAC 科目を希望する場合の手順」に基づいて、既存科目だけではなく、新設科目を共同で

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

考えていくことも可能となったことは評価できる。今後、カリキュラムの共同制作等、ILACと学部の協働が活発になることを期待したい。なお、ILAC 執行部会議やILAC活動におけるさまざまな次元において、事務局の貢献が大きく、教員・職員の協働参画のモデルケースとして学内のモデルとなりうるものとして評価できる。

4 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

4.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度4.1①に対応

はい

※概要を記入。

かつて「教養部」が担っていた業務と責任を、教養部解体後の学部間協働運営組織として問題なく継承していくために、3.1①に記述した通り、必要な職と組織を設け、権限と責任を明確にした規程を整備している。市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）が主管する事業や会議体としての運営委員会の専権事項は「市ヶ谷リベラルアーツセンター規程」第3条、第5条等に明記され、「規程」とこれを補う内規（施行細則）に則って、運営を行なっている。専任人事・兼任人事も全て、規程とそれを補う内規の定めを遵守して行なわれている。

ILAC科目に関する毎年のルーティン業務は、各学部に分属している別表2教員（かつての教養部所属教員、及びその後任にあたる専任教員）をコアメンバーとする7つの分科会が主として実務を担っている。学部教授会の審議・承認が必要な事項は、運営委員会の委員である各学部教授会主任を通じて教授会に諮られ、その結果を運営委員会に持ち寄って、最終決定がなされる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・市ヶ谷リベラルアーツセンター資料集（規程、内規等）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

前章「3 教員・教員組織」の長所・特色の記述に同じ。ILACに専従の専任教員はおらず、正副センター長も、7つの分科会の委員長も、市ヶ谷6学部に分属している教員である。これら（主として別表2教員）と学部代表（教授会主任）により構成される協働運営組織として、学期ごとに2000超の開設科目を管理・運営しているのがILAC運営委員会である。

毎年の時間割編成に関わるルーティン業務が中心となるが、大がかりなカリキュラム改革などが構想される際は、市ヶ谷リベラルアーツセンター規程第8条に記されたILACセンター長の権限を活かして、ワーキンググループに相当する委員会・プロジェクト等の特設し、企画・立案して運営委員会に諮る。最近では、新カリキュラムに結実した「教養体系化プロジェクト」（2013・14年度）と、その答申を実現すべく2015・16年度に特設された「カリキュラム委員会」、2017年度の「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」、そして2021年度にはカリキュラムマップ・ツリーの体系化や可視化を図り、学生によるILAC科目の履修を促進させるための「ILACカリキュラムマップ・ツリー体系化プロジェクト」が設置された。それぞれ時々のILACの課題に対応し、さらなる改革を推し進める役割を果たしてきた点は評価できると考える。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

ILAC発足から20年ほどが経過し、ILACを取り巻く環境は変化してきた。さらに、新たに対応すべき課題も増えてきていることから、現在の状況に即し、また、今後想定される変化にも対応できるように組織として修正を図る部分があると考え。それとともに、各学部とILACの連携もさらに必要になってくると考える。そのような動向に対応できるよう

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

に、まずは規程等の見直しの必要性の有無を検証するとともに、各学部と ILAC との連携をさらに強固にする新たな仕組みを設けることが今後の課題となる。

【大学運営・財務の評価】

ILAC が主管する事業や会議体としての運営委員会の専権事項は「市ヶ谷リベラルアーツセンター規程」に明記され、「規程」とこれを補う内規（施行細則）に則って、運営を行なっている。専任人事・兼任人事も全て、規程とそれを補う内規の定めを遵守して行なわれている。ILAC 科目に関する毎年のルーティン業務は、7つの分科会が主として実務を担っている。学部教授会の審議・承認が必要な事項は、運営委員会の委員である各学部教授会主任を通じて教授会に諮られ、その結果を運営委員会に持ち寄って、最終決定がなされる。以上のことから、運営委員会等は規程に則って適切に運営されており適切である。ILAC 発足から約 20 年経過し、ILAC を取り巻く環境は変化してきたことから、今後は、既存の規程等の見直しの必要性の有無や、各学部との連携強化など新たな課題に取り組みられることを期待したい。

III 2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	2017 年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料とした議題を運営委員会において設け、各学部・分科会独自のアイデア・提案も募りながら、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げる（リソースをさらに豊かにする）ことをめざした議論をおこなう。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 学部・ILAC が共同して、市ヶ谷地区の共通の教養教育の幅を広げる可能性について、検討する。 学生モニター制度を活用して、学生側からの対面/オンライン授業のあり方の要望や課題を整理して、教養教育の幅を広げるリソースとする。また、同制度を活用して、現行のカリキュラムマップ・ツリーの問題点の改善へとつなげる。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ILAC 長がメンバーとして参加している市ヶ谷コミュニティ連携会議において、市ヶ谷地区の共通した教育課題に ILAC として貢献する。 学生に対面授業とオンライン授業における教養教育について、および、現行のカリキュラムマップ・ツリーについてのモニタリングを行い、ILAC で情報共有する。
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		S
理由		<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムのスリム化の検討に合わせて、各分科会で現行のカリキュラムの改善点等についても検討を行った。また、各分科会委員長との懇談会や各学部教授会主任との懇談会においても教養教育の在り方について意見交換を行い、それらの意見は学部長懇談会、及び、教育開発支援機構会議において提起した。 学生モニター制度を活用して、現行のカリキュラムマップ・ツリーの活用状況や問題点等についてモニタリングを行った。その情報は ILAC 運営委員会にて共有した。
改善策	—	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 少人数制授業科目におけるアクティブラーニングの促進や課題解決型授業の新規導入をはかる。 学部専門教育カリキュラムと ILAC カリキュラムの有機的なつながりを学生に理解させるため、各学部の新入生ガイダンス等の改善を工夫する。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 2020 年度のオンライン授業での経験の蓄積、またオンライン授業が新たな授業形態として定着していることを受けて、アクティブラーニングを含めた、授業目的を達成するための効果的なオンライン授業のあり方を検討する。 アクティブラーニングを実施できる総合科目の「教養ゼミ」の履修に関する制度的な改善について検討する。 カリキュラムマップ・ツリーの視覚的体系性・順次性可視化の向上と一覧性の改善に向け

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

		て検討を開始する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ILAC 授業担当者（教員）にアンケートを取って、2020 年度のオンライン授業との比較や変化、またオンライン授業の工夫やアクティブラーニングのグッドプラクティスを整理し、ILAC でその情報共有を図る。 過少人数受講生科目となりがちな「教養ゼミ」を意欲ある学生が複数履修できる制度を導入する。 カリキュラムマップ・ツリーの可視化の向上にむけて、プロジェクトチームを立ち上げて、議論を開始する。また、テーマごとの履修モデルを試験的に構築するための議論も開始する。
	年度末報告	執行部による点検・評価 自己評価 A
		理由 <ul style="list-style-type: none"> 各分科会でオンライン授業における効果的な取り組みや工夫について意見交換を行い、それらの情報を ILAC 運営委員会にて共有した。 プロジェクトチームを立ち上げてカリキュラムマップ・ツリーの可視化の向上について検討を行った。議論を重ねた結果、カリキュラムマップ・ツリーの議論に留まらず、現行のシラバスの有用性など学生の履修のあり方についての議論へと展開していった。なお、同プロジェクトは、全学的な取り組みとして提案することとなり、次年度においても継続して取り組んでいくこととなった。 「教養ゼミ」の履修に関する制度的な改善については、過少人数受講生科目がスリム化の対象となる可能性があることから、具体的な取り組みには着手するには至らなかった。
		改善策 <ul style="list-style-type: none"> 次年度においては、スリム化の議論と合わせて、「教養ゼミ」のあり方や制度について具体的な検討を進める。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	2017 年度にスタートした、体系的（順次性）を重視した新カリキュラム（昨年度入学者から適用）の成果は、本格的には完成年度（2020 年度）をもって明らかになるが、それまでに暫定的な成果を調べるため、新たに幾つかの指標を導入する。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 2020 年度をもって新カリキュラムの完成年度を迎えたので、新カリキュラムの成果、課題点、改善・対応策を洗い出し、それを成果と継続的な解決すべき指標とする。その際に、オンライン授業の成果にも十分な注意を払う。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 2021 年度における「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」に関する分科会の課題点・その対応策等取り組み状況のフィードバックをオンライン授業の場合も含めて、行う。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価 自己評価 S
		理由 <ul style="list-style-type: none"> 各分科会にて新カリキュラム完成年度前後の履修動向の分析を行い、それらの分析結果を ILAC 運営委員会にて共有した。 オンライン授業の成果についても各分科会で効果的な取り組みや工夫について意見交換を行い、それらの成果は ILAC 運営委員会にて情報共有した。
	改善策	—
No	評価基準	教員・教員組織
4	中期目標	2017 年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料として、6 学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化をめざす。
	年度目標	ILAC 関連 6 学部と ILAC との科目、人的交流の協働の促進を目指し、相互補完的な教養教育の体制やあり方について検討し、その結果を ILAC 運営委員会で情報共有する。
	達成指標	ILAC 運営委員教授会主任と ILAC 執行部の連携会議を開催し、学部と ILAC の協働の可能性について検討する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価 自己評価 A
理由 <ul style="list-style-type: none"> スリム化への対応に際して、各学部教授会主任との懇談会を開催して意見交換を行うと 		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

			ともに、ILAC 科目と学部専門科目の乗り入れについても検討を行った。なお、その懇談会において各分科会と各学部との連携会議の必要性を確認し、次年度以降、ILAC と各学部との協働を具体的に検討していくこととなった。
		改善策	・今年度において各分科会と各学部との連携の足掛かりができたことから、次年度は各分科会委員長と各学部教授会主任との連携会議を定期的で開催し、両者の協働について具体的に検討を行っていく。
No	評価基準	教育研究等環境	
5	中期目標	履修者数が教室定員を超過する大人数授業が少なくない ILAC 科目において、適正な授業環境の確保（履修者数の調整）に努める。	
	年度目標	大人数授業、あるいは過大人数授業の授業の質を担保するために、オンライン授業であっても、抽選制を導入し、受講者数を制限しているが、こうした過大、あるいは大人数授業のオンライン授業の環境について、調査、検討する。	
	達成指標	オンライン授業形態における大人数授業、あるいは過大人数授業のメリット・デメリット、授業環境の要望について調査する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		・各分科会でオンライン授業における効果的な取り組みや工夫について意見交換を行うだけでなく、オンライン授業の問題点やデメリットについても検討を行った。それらの意見は ILAC 運営委員会にて情報共有が図られた。	
改善策	-		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
6	中期目標	自然科学センター（自然科学分科会教員が参加）ですでに実績がある、一般市民や児童への啓発活動「サイエンスコミュニケーション」や、社会連携の「窓口」的な意義を有しているゼロ群のキャリア教育関連科目群に加えて、他にも新たに、社会の「現場」体験・課題解決型科目をゼロ群に開設することをめざす。	
	年度目標	0群に設置した、社会と連携し、社会の「現場」体験ができる「リベラルアーツ特別講座」「リベラルアーツ特別実習」の履修状況を調査し、どのように機能しているかを検討する。	
	達成指標	「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」のゲスト講師の方々や科目責任者が振り返りを行い、課題点や今後の展望を検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		・「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」の実施に際しては科目責任者も関与しており、履修動向や授業内容、成果、受講生の意見等の分析を行った。 ・「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」の実施主体であるイオンフィナンシャルサービス株式会社の担当者やゲスト講師とはメール等を通じて課題点や今後の展望について検討を行った。	
改善策	-		
【重点目標】			
<p>2017年度にスタートした新カリキュラムについて、2020年度には「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」として各分科会の観点から改善点および対応策等を挙げてもらった。2021年度ではそれらの改善点や対応策等を ILAC 全体、各分科会で共有し、活用することを目指す。また、コロナ禍の中でオンライン授業が有効なオルタナティブとして認知する向きが見えるが、創意工夫したオンライン授業の取り組みは履修者数や科目特性によってそれぞれ異なると思われる。そこで、2021年度は、2020年度のオンライン授業の工夫やアクティブラーニングのグッドプラクティスを情報共有し、活用に導くことが必要である。一方、現在、ILAC 科目のカリキュラムマップおよびツリーは体系性（順次性）を重視した総花的な形態であるため、学生がそれらを理解して履修計画を立てることは困難であり、幅広いリベラルアーツの涵養にはつながらない状況であることが課題となっている。そこで、学生の学びの体系・方向性が可視化されたカリキュラムマップおよびツリーの見直しならびに公開に取り組むとともに、学際的なテーマに沿った科目群をグループ化し、学びの方向性を明示する履修モデルを提示することを目指す。</p>			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

【目標を達成するための施策等】

ILAC 授業担当者（専任・兼任教員）にオンライン授業に関して、その取り組み、工夫、課題点、要望、試験の方法、評価の方法、メリット・デメリット、オンライン授業自体に対する評価等についてアンケートを取り、それを集計し、各分科会と情報共有するとともに、そのなかのグッドプラクティスを紹介する。そして、Reborn プロジェクトに関する分科会の課題点およびその対応等の取り組み状況について相互に意見交換する場を設ける。また、新たにプロジェクトチームを設置した上で、学生が学びの体系・方向性を理解しやすいカリキュラムマップおよびツリーの見直しや、学際的なテーマごとの履修モデルを試験的に構築する。さらに、学生モニター制度を活用してオンライン授業やカリキュラムマップおよびツリーに対する学生の意見を収集し、新たなプロジェクトに反映させる。

【年度目標達成状況総括】

今年度当初における ILAC の主な取り組み課題としては、①2017 年度にスタートした新カリキュラムに関わる取り組みである Reborn プロジェクトの検証、②オンライン授業のメリットやデメリットの洗い出しや授業における工夫や課題等の検証、③カリキュラムマップおよびツリーの可視化の向上を目標とする見直しの検討であった。①や②については各分科会で検討し、その内容を ILAC 運営委員会等で共有することで、ILAC 全体として教育の質の向上を図ることができた。③についてはプロジェクトチームを発足して議論を重ね、今後の方向性についての答申を得ることができた。このように年度目標に対して一定の成果を得たものの、年度当初には検討事項ではなかったスリム化への対応の影響を受けた取り組み課題もあり、十分には対応できない点があったことは否めない。この点は次年度も引き続いて取り組むべき課題となる。一方、これらの課題やスリム化への対応を検討する中で、ILAC 全体ならびに各分科会と各学部による協働の足掛かりを示すことができた点や、次のカリキュラム改革に向けての検討課題や 3.8 コマ条項ならびに 3.0 コマ条項など制度面と運用実態に関わる検討課題を示すことができた点も本年度の成果であるとともに、次年度以降の取り組むべき課題であると考えられる。

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】

ILAC では、設定した目標について概ね達成しており、評価できる。ILAC 授業担当者（専任・兼任教員）にオンライン授業について、取り組みや、工夫、課題、要望、試験方法、評価方法、オンライン授業自体に対する評価等についてアンケートを実施・集計し、各分科会で情報共有するとともに、そのなかのグッドプラクティスを紹介するなど、新型コロナウイルス感染対策として積極的な取り組みをしたことは高く評価できる。

IV 2022 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	2018～2021 年度の期間では 2017 年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題が検証されてきた。それらを踏まえ、2022～2025 年度の期間では、スリム化や学部専門科目との乗り入れなどこれからの課題を視野に入れつつ、次のカリキュラム改革に向けての準備を行う。また、現状のカリキュラムにおいても、学生が ILAC 科目を把握し易くするとともに、履修し易くなるよう改善を図る。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> スリム化の計画を具体化させる。 ILAC 科目と学部専門科目の乗り入れ可能性を検討し、そのための基本ルールを構築する。 2021 年度から検討を開始したカリキュラムマップ・ツリー可視化プロジェクトをさらに進める。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ILAC 全体ならびに各分科会で具体的なスリム化案を作成する。 ILAC と各学部とで科目の乗り入れについて検討を行い、基本ルールを作成する。 ILAC 内部あるいは他組織と共同で、カリキュラムマップ・ツリーの可視化や履修登録の際の利便性について検討を開始する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	少人数授業や多人数授業、対面授業やリアルタイムオンライン授業、オンデマンド授業など授業形態・科目特性に合った工夫や効果的な取り組みを整理するとともに、実際の授業に取り入れられるようにする。また、後シラバスを積極的に活用することで、教員自身が授業の取り組みについて自己評価を行えるようにする。
	年度目標	・オンデマンド型・資料配布型の授業に合う科目をリストアップするとともに、それらの授

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

		業における工夫や効果的な取り組みについて情報共有を図る。 ・後シラバスを積極的に活用するための方策について議論を行う。
	達成指標	・オンデマンド型・資料配布型授業における利点や工夫、効果的な取り組みをまとめた一覧表を作成し、ILAC 運営委員会にて提示する。 ・後シラバスの利用率を上げる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	授業形態や科目特性によって授業における工夫や効果的な取り組みは異なるのと同様に、授業形態や科目特性によって学習成果の評価指標は異なることから、それぞれに即した学習成果の評価指標を考える必要がある。また、それぞれの工夫や効果的な取り組みが学習成果に及ぼす影響を検証する。
	年度目標	・オンライン授業の効果や学習成果と対面授業の効果や学習成果との比較を検証する。 ・オンデマンド型・資料配布型の授業における学習成果の適切な評価指標を検討するとともに、それら授業における工夫・効果的な取り組みが学習成果に及ぼす影響を検証する。
	達成指標	・2020 年度および 2021 年度におけるオンライン授業の効果や学習成果と、2022 年度における対面授業の効果や学習成果について整理し、両者の比較を ILAC 運営委員会にて検証する。 ・オンデマンド型・資料配布型の授業における学習成果の適切な評価指標や、授業時における工夫・効果的な取り組みについて意見聴取を行い、その結果を ILAC 運営委員会にて検証する。
No	評価基準	教員・教員組織
4	中期目標	スリム化や次のカリキュラム改革など現在ならびに今後直面する課題に対応するために、現状に即した ILAC のあり方を検討する必要がある。また、2017～2021 年度に 6 学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化を図ってきたが、今後はそれらの動向をさらに進めるために、ILAC と各学部との連動・協働をより充実させていくことが課題である。
	年度目標	・教養教育を担う組織として、現状の ILAC の長所や短所について検討を行う。 ・2021 年度の内部質保証委員会における答申を踏まえ、ILAC の各分科会と各学部の連動・協働を促進させる。
	達成指標	・ILAC の組織および所属教員を規程する内規 12 条に関し、その規程を維持することによる長所や短所、廃止することによる長所や短所、また修正すべき内容などについて意見聴取を行い、ILAC 運営委員会にて検討する。 ・審議事項に合わせて、適宜、ILAC の各分科会委員長と各学部の教授会主任との意見交換会を開催し、その審議内容は ILAC と各学部で共有する。
No	評価基準	教育研究等環境
5	中期目標	上記の教育方法や学習成果の項目と連動し、科目特性に応じた授業形態を再検討するとともに、それらの授業形態における必要な設備や環境について検討する。また、2017 年度にスタートした新カリキュラムにおける積み残し課題である教養ゼミのあり方や制度、履修促進について検討する。
	年度目標	・大人数授業やオンデマンド型・資料配布型の授業において必要な設備や環境について検討する。 ・現状の教養ゼミの問題点を整理し、そのあり方や制度、履修促進の方法について検討する。
	達成指標	・大人数授業やオンデマンド型・資料配布型の授業において必要な設備や環境について、教員ならびに学生双方の意見を整理し、ILAC 運営委員会にて検討する。 ・教養ゼミのあり方や制度、問題点、履修促進の方法について ILAC 運営委員会にて検討する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
6	中期目標	「リベラルアーツ特別講座」や「リベラルアーツ特別実習」、「課題解決型フィールドワーク」のように、ビジネス社会など外部と繋がりを持ち、現代社会で必要なリテラシーを修得できる科目を充実させる。また、学外からの受講者を呼び込むサーティフィケート・プログラム

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

	や公開講座について、ILAC の組織および教員が中心となって検討する。
年度目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「課題解決型フィールドワーク」として開講する科目を充実させる努力をする。また、外部組織が関わる新規の寄付講座の開設について検討する。 ・学外向けのサーティフィケート・プログラムや公開講座について検討する。
達成指標	<ul style="list-style-type: none"> ・「課題解決型フィールドワーク」の応募数を増加させる。 ・新規の寄付講座の開設可能性について検討する。 ・ILAC を中心とする学外向けのサーティフィケート・プログラムや公開講座の実施可能性を検討するとともに、具体的な候補案を検討する。
<p>【重点目標】</p> <p>コロナ禍でのオルタナティブな授業のあり方を検討し、またスリム化への対応を図る中で、ILAC のあり方がいま一度問われていることから、今年度は現状に対応し、今後のさまざまな変革を見据えた上で ILAC のあり方について検討していきたい。また、ILAC だけでなく、各学部との関係性も視野に検討を行う。さらに、2017 年度にスタートした新カリキュラムの有効性や課題が明らかになってきた現状を踏まえ、次のカリキュラム改革の検討の準備に着手する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ILAC の内規 12 条の長所や短所について意見聴取を行い、整理した上で検討を行う。 ・必要に応じて各分科会委員長と各学部教授会主任との意見交換会を開催し、ILAC と各学部の適切な関係性を模索する。 ・次のカリキュラム改革にて対応すべき事項や ILAC として強化を図りたい事項について幅広く意見聴取を行っていく。 	

【2022 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

<p>ILAC では、2018～2021 年度の期間において、2017 年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題が検証されてきた。それを踏まえ、2022～2025 年度の期間では、スリム化や学部専門科目との乗り入れなどこれからの課題を視野に入れつつ、次のカリキュラム改革に向けての準備を行うとともに、現在ならびに今後直面する課題に対応するために、現状に即した ILAC のあり方を検討すること等を中間目標に掲げ、その実現に向けて、スリム化の計画の具体化や、ILAC 科目と学部専門科目の乗り入れ可能性を検討し、そのための基本ルールを構築するといった複数の具体的な年度目標を掲げていることは評価できる。COVID-19 収束後のさまざまな変革を見据えた上で ILAC のあり方について検討するとともに、ILAC と学部との連動・協働をこれまで以上に充実させていくことが期待される。</p>
--

小金井リベラルアーツセンター

I 2021 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

<p>【2021 年度大学評価結果総評】(参考)</p> <p>小金井リベラルアーツセンターでは、2020 年度は科学実験では COVID-19 問題のため、春学期は対面授業をほとんど実施できなかった。その事態に対応するため、動画を含むオンライン教材を作成して授業を実施したこと、また、対面でのレポート指導の代替として、メールを利用した質問対応、TA を利用したレポート添削などによりフィードバックをおこなったことは、評価できる。</p> <p>小金井リベラルアーツセンターは、理系学部には適合した内部質保証体制の整備が求められる。従来より懸案であった情報科学部の KLAC への参加については、2020 年度より諸語科目の履修が開始された。今後も小金井キャンパスにおける教養教育の充実に向けて、多角的な取り組みが行われることを期待する。</p> <p>新型コロナウイルス感染症を防ぎながら教育活動を行ってゆくことは全学的な課題である。オンライン授業の充実、問題点の洗い出し、学生個々のケア、対面型授業における工夫等、3センターで力を合わせ、問題解決に取り組まれることを期待する。</p>
<p>【2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】</p> <p>科学実験 I・II・III (物理学実験、化学実験、生物学実験) では、2020 年度に作ったオンライン教材を用いた自宅学習、メールやレポート添削によるフィードバック指導、少人数化したクラス編成での対面実験授業を併用することにより、コロナ禍でも安全かつ効率的に実験学習することが可能になった。</p>

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

内部質保証体制については、生命科学部教授会主任を委員長とする自己点検委員会を組織し、理系専門教育と分科会（英語、人文・社会科学、スポーツ健康科学、諸語、リテラシー、数学、理科）の守備範囲を考慮し分担して自己点検を行った。

情報科学部については、2020年度よりKLAC 諸語科目の履修を開始し、2021年度も一定数の履修者があった。今後の展開を想定し、ひきつづき履修登録状況の把握等を行う予定である。

COVID-19 対策については、科目の特性や授業形態を踏まえながら、各分科会で、オンライン授業の充実や学生のケアなどに取り組んだ。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

小金井リベラルアーツセンター（以下、KLAC）では、科学実験科目において、2020年度に作成したオンライン教材を用いた自宅学習、メールやレポート添削によるフィードバック指導、少人数化したクラス編成での対面実験授業を併用するなど学生の立場に立って、コロナ禍でも安全かつ効率的に実験学習に取り組むことができたことは、コロナ禍における対応として大いに評価できる。

内部質保証体制については、独自の自己点検委員会を組織し、理系専門教育と分科会（英語、人文・社会科学、スポーツ健康科学、諸語、リテラシー、数学、理科）の守備範囲を考慮した上で、

きめ細かい自己点検を行っており評価できる。

情報科学部における KLAC 諸語科目の履修状況については、ひきつづき履修登録状況の把握等に取り組むことを期待する。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

1.1①質保証活動に関する各種委員会（質保証委員会等）は適切に活動していますか。2018年度1.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

・KLAC 運営委員会を中心に KLAC として質保証活動に取り組んだ。一例として、年度末報告の作成に向けて、生命科学部教授会主任を委員長とする自己点検委員会を3回にわたって開催するとともに KLAC 運営委員のあいだでメールを交換し、1年間の活動を点検した。

・また、運営委員会にオブザーバー参加している情報科学部執行部にも随時意見を求めている。

・各分科会はメールや会合によって授業改善の意見交換を日常的に行い、さらにシラバスチェックなど具体的施策を通じて質保証を行っている。

1.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19 への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。新規

※取り組みの概要を記入。

・2020年度の質保証活動の一環として、各分科会の COVID-19 への対応状況を振り返り、有効な対策や課題を確認したことが、2021年度の COVID-19 対応に寄与した。一例として、英語分科会・諸語分科会・人文社会分科会では、2020年度にオンライン授業の方法について合同の懇談会を開催したことが、教育効果向上に役立ったことを確認したため、2021年度も同様の懇談会を継続的に開催した。同様に、2021年度の質保証活動をもとに、2022年度の COVID-19 対応を進める予定である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・懇談会の実施案内

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

内容
・自己点検委員会を中心とする、KLAC 全体としての質保証活動と同時に、分科会を単位とした自律的な質保証活動もおこない、KLAC が開講する多様な科目の特性を生かしている点が長所である。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし

【内部質保証の評価】

KLAC 運営委員会を中心に、KLAC として自己点検委員会を 3 回開催するとともに、運営委員の間でメールを交換して 1 年間の活動の点検を行っている。また、各分科会はメールや会合によって授業改善の意見交換を日常的に行うとともに、シラバスチェックなど具体的施策を通じて質保証を行っており、質保証活動に関する各種委員会は適切に機能していると評価できる。

2 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

2.1①幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。2021 年度 1.1①
に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。
英語科目群、教養科目群（人文・社会・自然科学系、スポーツ健康科学、選択語学系、リテラシー系）、理系教養科目群（数学系、理科系）からなる幅広い教養科目を提供している。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
該当せず
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版） ・生命科学部生のための履修の手引き（Web 版） ・KLAC 運営委員会資料・議事録

2.1②初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。2021 年度 1.1②に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・数学科目では、高等学校との接続にも配慮した共通テキストを採用している。 ・理系教養科目では、理工学部用のリメディアル科目として、入門物理学と入門数学を設置し、リメディアル教育を実施して、高校から大学への理科・数学に接続を図っている。 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲではガイダンス時に事前アンケートをとり、高校での理科履修状況を調査している。理工学部では化学、生物の履修率が低く、生命科学部では物理の履修率が低い傾向にあった。そのため、高校で理科科目を未履修であっても学生が対応できるように、教材資料を初年次向けに作成している。また、理科科目が未履修の学生に対しては TA により、よりきめ細やかな学習指導を行っている。 ・リテラシー科目では、高等学校までの基本的なパソコン操作の習熟度を調査し、それに基づいたテキストの作成および TA やラーニング・サポーターによるサポートを実施している。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S」：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

該当せず
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・書籍『コア講義 微分積分』、『コア講義 線形代数』（裳華房） ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ事前アンケート ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ教材資料

2.1③学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。2021年度

1.1③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。
人文・社会科学分科会 <ul style="list-style-type: none"> ・リテラシー科目では、社会的及び職業的自立に不可欠なパソコン操作や文章作法を取得する機会を提供している。 ・「キャリアデザイン」では、自分自身を理解し、自分の生き方・働き方について考える機会を提供している。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
該当せず
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・「キャリアデザイン」シラバス

2.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

2.2①学生の履修指導を適切に行っていますか。2021年度1.2①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・「履修の手引き」や入学時ガイダンスにおいて、各学科の専門分野を学ぶための土台となる重要な科目群について、履修を推奨している。特に、科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについては、理工学部・生命科学部の各学科が履修をつよく勧めている。 ・英語および諸外国語科目については、入学時などに語学ガイダンスを実施している。また英語科目では冊子「英語上達への道」を作成し配布している。なお、COVID-19 対応のため、2021年度の入学時ガイダンスはオンデマンド形式で行った。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
該当せず
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web版） ・生命科学部生のための履修の手引き（Web版） ・各学科の入学時ガイダンス資料 ・語学ガイダンス（英語・諸語）資料、冊子「英語上達への道」（Hondanaに掲載）

2.2②学生の学習指導を適切に行っていますか。2021年度1.2②に対応

S： さらに改善することができた
※取り組み概要を記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・理系教養科目では、TAやラーニング・サポーターを学習指導全般に活用している。特に実験実技系科目である科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおいては、TAによるきめの細かい実験指導・レポート指導が効果的であった。また2020年度に引き続き、春学期と秋学期双方の化学系基礎科目の一部で授業支援アシスタントを採用して、オンラインでの授業実践に活用した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>・リテラシー科目では、パソコンの基本ソフト（Word, Excel, PowerPoint 等）の活用スキルの向上を目的として、ラーニング・サポーター制度を活用している。また、レポート執筆の基本ルール、効率的な情報処理手法、効果的なプレゼンテーションスキルを修得できるような課題を設定し、その解決手順を詳しく解説している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>・数学分科会では生命科学部の数学系教養科目を対象とするラーニング・サポーター1名を採用した。 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、動画を含めたオンライン教材を用いた自宅学習と、少人数化したクラスでの対面実験を併用することで、コロナ禍での安全で効率的な学習が可能になった。すなわち、COVID-19感染状況の悪化した春学期の一時期以外、春学期・秋学期ともに混乱なく対面実験が実施できた。また、オンライン教材での学習と対面実験の併用を当初から設定したため、両者の連携が比較的良好で、効果的な学習につながった。COVID-19の収束後も、この学習システムは効率的な学生の実習に活かすことが期待される。この様子はHOSEI2022生命科学部パンフレット記事に取り上げられた。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲガイダンス資料 ・科学実験Ⅱ資料「レポートの書き方」「レポートチェック事項」 ・HOSEI2022生命科学部パンフレット ・授業支援アシスタント実績報告</p>

2.2③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。2021年度1.2③に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※取り組み概要を記入。</p>
<p>・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、毎回レポートを課し、予習・復習を盛り込むことにより、学習時間を確保している。 ・リテラシー科目では、課題の提示と、自己学習（復習用）の教材や資料提供で学習時間増加を促進している。 ・英語科目・諸語科目では、兼任講師も含めた授業打ち合わせ会を実施し、学習時間についての理解の共有を図っている。またシラバスチェックを通じて、学習時間や授業計画を確認している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>該当せず</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・科学実験Ⅱ資料「レポートの書き方」「レポートチェック事項」 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲガイダンス資料 ・外国語授業打ち合わせ会案内</p>

2.2④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。2021年度1.2④に対応

<p>S： さらに改善することができた</p>
<p>【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p>
<p>・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、COVID-19問題対応も考慮して、実験動画などのオンデマンド教材の作成を行い、オンラインと対面実験を併用する効率的な授業実施への取り組みを継続している。 ・リテラシー科目では、演習時間の確保、自ら設定した調査課題の発表及び教員・TAとの意見交換など、アクティブ・ラーニングの導入を心掛けている。 ・諸語分科会の一部の科目では、発音指導ビデオ、音声データの作成、アプリの活用などICTを活用した授業を導入している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、昨年度、対面授業の実施ができなかったときに、学習支援システム等を用いて、課題レポートの添削をし、レポート内容が不十分な学生に対しては再提出を求めるなどのフィードバック指導を確立した。本年度は対面授業とレポートのフィードバック指導を両方実施することにより、学生の実験内容についての理解力を高めると同時に、論理的な文章を書く能力を育成することが可能になった。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの実験動画資料
- ・HOSEI2022 生命科学部パンフレット

2.2⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。2021年度

1.2⑤に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※どのような配慮が行われているかを記入。

- ・2021年度も受講者登録抽選科目については抽選を行い、一授業あたりの学生数の配慮を維持した。
- ・英語科目については必修科目を含めて定員を設けており、内容・レベルに適した受講者数を維持するよう対応している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学部・生命科学部共通 教養科目・教職科目 時間割（Web版）
- ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web版）
- ・生命科学部生のための履修の手引き（Web版）

2.2⑥シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。2018年度2.2⑥に対応

はい

【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。

- ・2021年度も、全科目（授業）に対して各分科会によるシラバスチェックを行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・KLAC運営委員会資料・議事録

2.2⑦授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。2018年度2.2⑦に対応

はい

【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。

- ・英語科目・諸外国語科目では打ち合わせ会を開催し議論・検証を行っている。
- ・その他の科目でも、分科会ごとに専任および兼任を含めた担当教員同士の懇談会や業務連絡で検証している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・外国語授業打ち合わせ会案内
- ・懇談会及び業務連絡資料

2.2⑧通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果についても教えてください。2021年度

1.2⑥に対応

※取り組みの概要を記入。

- ・スポーツ健康科学実習では毎回の授業での課題提出のほか、オンライン形態での授業効果を高めるため「身体活動・運動実践記録」を作成し、日々の活動量や運動機会の記録と毎週の振り返りを行うことで、毎日の運動を習慣づけ、健康の維持・増進を促した。
- ・数学分科会では、対面授業の同時オンライン配信のわかりやすい実施方法を検討し、授業デモの動画を作成して兼任講師と共有するとともに、懇談会を実施し情報共有を行った。
- ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、実験動画などのオンデマンド教材を作成・活用して、対面実験での授業進行を効率化し、クラスを少人数化することにより、COVID-19流行下でも安全かつ有効な教育体制の構築・運用を行った。COVID-19など感

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>感染症による欠席を把握するため、欠席時は事前にメーリングリスト宛にメールで連絡するシステムを構築した。欠席した学生に対しては、後日補講等で対応した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学系基礎科目の一部では、前年度に学務部教育支援課企画の「オンデマンド授業コンテンツの作成」を利用して作成したオンデマンド教材を用いて、COVID-19 流行下でのオンライン授業への対応を行った。 ・リテラシー科目では、オンライン受講者に対して教室の混雑を気にせず、パソコン操作に関する質問ができるよう、ラーニング・サポーターを導入している。 ・英語分科会では、学部のポリシーに従い、すべての英語授業を Zoom で行った。そのため、兼任教員に対して、Zoom や Hoppii の使用方法の講習会を行なった。 ・英語・諸語・人文社会分科会合同で、専任・兼任担当教員に向けて、Zoom や Hoppii および成績登録システムの使用方法や、ハイフレックス授業の実施方法の講習会を数度にわたって開催した。また、ハイフレックス授業実施に伴う質問にも個別に対応している。
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・2021 年秋学期小金井キャンパス スポーツ健康科学系実技科目履修者 身体活動・運動実践記録 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの実験動画 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのガイダンス資料

2.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

2.3①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。2021年度1.3①に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>【確認体制及び方法】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数学系科目では、複数教員が担当する科目において成績の比率調整など成績基準を打合せている。 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、各々の実験への出席・課題レポート提出状況等の資料に基づき、成績会議を行い、適切な成績評価・単位認定を行っている。 ・英語科目では TOEIC による習熟度別クラス編成を行うが、成績評価において公平を期するため、クラスのレベルを考慮し習熟度上位クラスで成績を有利に評価している。また、試験答案の学生への返却を実施している。 ・リテラシー科目では、小テスト、演習・レポート課題に基づき、定量的に評価している。
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>該当せず</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ担当者会議議事録 ・英語科目時間割表（レベル別）

2.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

2.4①成績分布の状況を把握していますか。2021年度1.4①に対応

<p>はい</p>
<p>【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅱにおいて、全クラスの成績分布の年次推移を集計、担当教員間で共有している。
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅱ資料：成績分布の推移

2.4②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。2021年度1.4②

に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※取り組みの概要を記入。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・数学分科会では例年、統一試験を実施して指標の1つとしているが、2021年度はCOVID-19の影響で非実施とした。代わりに、共通で使用できる試験問題を作成し、期末試験で教員が適宜使用できるように共有を行った。 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは学習成果をレポート内容や試問で判定しており、各クラス（学科ごとにクラス編成）で課す教材・課題レポートの多くを共通設定し、クラス毎に評価が片寄らない配慮をしている。 ・英語教育においては、TOEICの点数を学習成果を測定する指標の一つとしている。また成績分布の目安を定めたガイドラインを作成し、兼任講師に展開している。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
該当せず
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ課題資料 ・英語分科会成績分布ガイドライン

2.4③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。2021年度1.4③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、実験作業や実験ノートの確認、レポートに関する試問等により実験内容の理解度・到達度を把握・評価するようにしている。 ・リテラシー科目では、学生が行ったプレゼンテーションや演習課題に対し、教員が試問することにより、理解度を把握している。 ・英語科目では学生が継続的に受験している TOEIC の成績集計を行い、学習成果を把握している。また集計した点数は、英語教育改善プロジェクトにおいて、各学科と共有している。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
該当せず
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・TOEIC 実施結果・集計結果

2.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

2.5①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2021年度1.5①に対応

S： さらに改善することができた
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理系教養科目では、プレースメントテストと入学後の数学・物理の成績についてその推移を入試経路別に調査している。 ・英語科目では、入学時、1年生12月及び2年生12月にTOEICを行い、さらに、3年生、4年生になってからも希望者に対して受験を促し、学習成果の把握に努めている。さらに、TOEICテストの結果に著しい成績上昇がある場合に、成績のボーナス制度が設定されている。加えて、英語教育改善プロジェクトにおいて、英語教育の在り方を継続して話し合っている。 ・SA（科学技術コミュニケーション演習）の実施は、COVID-19の影響で、2020年度より停止している。より有効なかたちで再開するために、理工・生命科学部両執行部および英語分科会教員などで議論した。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
英語科目では、学生のTOEICスコアの平均が上昇したことに合わせて、ボーナス制度の対象となるスコアを変更した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・TOEIC 実施案内 ・2022年度理工学部履修の手引き・生命科学部履修の手引き

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・英語教育改善プロジェクト資料・議事録

2.5②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。2021年度1.5②に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

【利用方法】※箇条書きで記入。

・授業改善アンケートのKLAC 担当科目の自由記述（KLAC からの申請で入手可能）について、必要に応じて理工学部・生命学部の執行部に開示する仕組みになっている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、従来から、共通の教材・課題の設定やTAの活用、担当者による成績会議の実施など、教育効果の向上に向けた努力を行ってきた。加えて2021年度は、2020年度に引き続き、オンライン教材の導入やクラスの少人数化といったCOVID-19への対応にも力を入れた。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

・数学分科会では対面授業の同時オンライン配信導入後に発生する問題に対応する方策を検討・実施する。
 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて、科目設置後10年を超え、設備・実験機器の経年劣化がみられつつある。近年の履修指導の成果で、多くの学科で科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの履修率が増加している。これはよい傾向であるが、入学者超過がおこった場合に履修者数が実験室の収容人数を超えると同時に、TAや実験機器等が不足する恐れがある。これに対し、科学実験Ⅲでは2019年度に顕微鏡を追加購入したり、科学実験Ⅱでは経年劣化の著しい実験機器に頼る一部の実験テーマを見直し、2020年度から一部テーマを変更するなどの対応を実施してきた。収容人数を増やすため、実習スペースを拡大することは現実的には困難であるため、引き続き学部と協力するなどして設備・機器の更新・充実を進める必要がある。
 ・スポーツ健康科学実習では対面授業を再開する上で、新型コロナウイルス感染リスクの低減を図るためには緑町グラウンドの有効活用（使用回数増）が不可欠の要素である。よって緑町地域協議会との調整やバス運行増便の予算化を要望する。併せて、身体活動に関わる実験実習に向けた設備・実験機器の整備が継続的な課題である。

【教育課程・学習成果の評価】

<①教育課程・教育内容に関すること(2.1)>

KLACでは、英語科目群、教養科目群（人文・社会・自然科学系、スポーツ健康科学、選択語学系、リテラシー系）、理系教養科目群（数学系、理科系）からなる幅広い教養を習得できるカリキュラム編成となっており、評価できる。

理工学部用のリメディアル科目として、入門物理学と入門数学を設置し、リメディアル教育を実施して、高校から大学への理科・数学に接続を図っているほか、科学実験科目ではガイダンス時に事前アンケートをとり、高校での理科履修状況を調査していることは評価できる。理工学部では化学、生物の履修率が低く、生命科学部では物理の履修率が低い傾向にあることを踏まえて、高校で理科科目を未履修であっても学生が対応できるように、教材資料を初年次向けに作成していること、理科科目が未履修の学生に対してはTAにより、よりきめ細やかな学習指導を行っていることは評価できる。数学科目では、高等学校との接続にも配慮した共通テキストを採用している点も評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

リテラシー科目では、高等学校までの基本的なパソコン操作の習熟度を調査し、それに基づいたテキストの作成およびTAによるサポートを実施していることに加えて、社会的及び職業的自立に不可欠なパソコン操作や文章作法を取得する機会を提供しており評価できる。「キャリアデザイン」では、自分自身を理解し、自分の生き方・働き方について考える機会を提供しており適切である。

<②教育方法に関すること (2.2) >

KLACの履修指導については、「履修の手引き」や入学時ガイダンスにおいて、各学科の専門分野を学ぶための土台となる重要な科目群について、履修を推奨している。特に、科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについては、理工学部・生命科学部の各学科が履修をつよく勧めており、その成果として、当該科目への履修率が増加していることは評価できる。英語および諸外国語科目については、入学時などに語学ガイダンスを実施していることに加えて、英語科目では「英語上達への道」という冊子を作成・配布しており評価できる。

理系教養科目、リテラシー科目では、TAやラーニング・サポーターを学習指導全般に活用してきめ細かい学習指導を実施しており適切である。科学実験科目では、動画を含めたオンライン教材を用いた自宅学習と、少人数化したクラスでの対面実験を併用することにより、コロナ禍でも安全で効率的な学習ができたことは評価できる。

効果的な授業形態の導入に関する取り組みとしては、コロナ禍にあつて、対面授業とレポートのフィードバック指導、両方を実施することにより、学生の実験内容についての理解力を高めると同時に、論理的な文章を書く能力を育成することが可能になったことは高く評価できる。

シラバスの適切性については、2021年度は全科目において各分科会でのチェックが行われている。また、授業がシラバスに沿って行われているかについても、各分科会等を中心に検証が行われている。

<③学習成果・教育改善に関すること (2.3～2.5) >

KLACの数学系科目では、複数教員が担当する科目において成績の比率調整など成績基準を打合せるなど、分野ごとに成績評価と単位認定を工夫・統一しており、適切性が確保されていると評価できる。

KLACでは、各分野(分科会)の特性に応じた分科会単位の取り組みを行っており適切である。また、具体的な学習成果の把握・評価、および学習成果の定期的検証等も、分科会ごとにその適正に合わせた形で入念に実施されており適切である。

授業改善アンケートについては、KLAC担当科目の自由記述(KLACからの申請で入手可能)について、必要に応じて理工学部・生命科学部の執行部に開示する仕組みになっており適切である。

3 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

3.1①組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。2018年度3.1①に対応

【リベラルアーツセンター執行部の構成、分科会の名称・役割・責任体制】※箇条書きで記入。

- ・執行部は、センター長、副センター長(各1名)で構成する。
- ・分科会として、英語、人文・社会科学、スポーツ健康科学、諸語、リテラシー、数学、理科の7つの分科会を置く。
- ・各分科会では、当該分野の学科目の時間割編成、担当者、単位習得などについて代表者を中心に審議し、KLAC運営委員会に提案する。
- ・理工学部教授会・生命科学部教授会・小金井リベラルアーツセンターは相互に協力して、教養教育に関する責任を分担する。

【明示方法】※箇条書きで記入。

- ・分科会の構成や役割分担等は、「小金井リベラルアーツセンター規程」に示されている。
- ・責任の所在は、「理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター教養教育に関する申合わせ」として文章化されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・小金井リベラルアーツセンター規程
- ・理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター教養教育に関する申合わせ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

3.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

3.2①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。2018年度3.2①に対応

はい
※リベラルアーツセンターの提供するカリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。
教養科目を主に担当する専任教員は、理工学部・生命科学部双方に所属しており、各分科会にそれぞれ複数名の教員がバランスよく配置されている。また、今後の教員採用に備えて、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にするとともに、オブザーバー参加している情報科学部との情報交換を行っている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.3 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

3.3①センター内のFD活動は適切に行なわれていますか。2021年度2.1①に対応

S： さらに改善することができた
【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。
各分科会において、科目の特性に合わせたFD活動を行なっている。
【2021年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・教員による授業相互参観：線形代数学及び演習 II（2021.10.20, 2021.11.3、担当教員：磯島伸）、情報処理技法（2021.12.21、担当教員：三橋秀生）など、合計10科目12回 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける独自アンケート調査 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける履修者数推移調査
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで学期末に実施している独自アンケート調査の結果について、専任教員が担当する一部のクラスについては、対象学科にその結果を公開した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・KLAC「教員による授業相互参観」報告書 ・科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ独自アンケート ・科学実験履修者数推移集計

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>・2017～2019年度に実施した、教養科目を主に担当する専任教員の純増人事が完了し、数学・理系教養科目と英語科目の指導体制が充実した。理系教養科目の各科目を、専任教員がコーディネートする体制が整い、各科目間での連携が図られはじめた。特に「科学実験Ⅰ（物理学実験）」では、リテラシー科目の「情報リテラシーと表現技術」で学習したワード、エクセルなどのPCソフトの使用法、PDFファイルの作成方法などを用いて実験演習を進める工夫をおこなっている。今後は座学（物理学基礎、化学基礎、生物学基礎）と実験系科目（科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）においても、学習内容の連携を高め、効率的かつより深い学習ができる体制を目指す。</p>

（3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>・今後数年間のあいだに、複数名の教養科目を主に担当する専任教員が定年退職となる。今後も教養教育をいっそう充実</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

させていくために適切な人事をおこなえるよう、理工学部・生命科学部双方の執行部と情報交換をおこなうことが重要である。

【教員・教員組織の評価】

KLACでは、センター長と副センター長が当該事業を統括しており、7つの分科会がそれぞれ当該分野の学科目の時間割編成、単位取得などについて代表者を中心に審議を行い、KLAC運営委員会に提案している。責任の所在は、「理工学部・生命科学部・KLAC教養教育に関する申し合わせ」の中で明確化されており適切である。

教員採用に関しては、理工学部と生命科学部で協議して採用がなされ、理工学部・生命科学部双方に所属し、各分科会にそれぞれ複数名の教員がバランスよく配置される体制となっており適切である。数学・理系教養科目と英語科目の指導体制が充実したこと、理系教養科目の各科目を専任教員がコーディネートする体制が整い、各科目間での連携が図られはじめたことは評価できる。

FD活動としては、科学実験科目において、独自のアンケート調査を実施しており、きめ細かい内容で学生の要望等をくみ取っており、一部のクラスについてはその結果を対象学科に公開したことは高く評価できる。今後は、その範囲を実験科目以外にも拡大していくことを期待したい。

4 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

4.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度4.1①に対応

はい

※概要を記入。

「小金井リベラルアーツセンター規程」を定め、センター長、副センター長、運営委員会や科目の分科会について役割や権限を規定する。さらに、理工学部教授会・生命科学部教授会・小金井リベラルアーツセンターは相互に協力して、教養教育に関する責任を分担することを「理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター教養教育に関する申し合わせ」に明記する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・小金井リベラルアーツセンター規程
- ・理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター 教養教育に関する申し合わせ

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

運営委員会では、7つの分科会が各分野の特色を生かして活動しており、有益な情報交換が行えている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特に問題はないが、現状の規定および運営方法について再確認することで今後の活動の活性化につなげる必要があると考える。

【大学運営・財務の評価】

KLACでは、「小金井リベラルアーツセンター規程」に従って適切な組織運営がなされていると判断される。学部教授

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

会とも協力して、教養教育に関する責任を分担することが、「理工学部・生命科学部・小金井リベラルアーツセンター教養教育に関する申合わせ」に明記されており、適切である。運営委員会では、7つの分科会が各分野の特色を生かして活動し、有益な情報交換を行うことができている、評価できる。

III 2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。
	年度目標	運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検を行い、内部質保証を維持する。
	達成指標	自己点検委員会の開催
	年度末報告	<p>執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討した。</p> <p>改善策 特になし。次年度も引き続き、自己点検委員会を開催することが望ましい。</p>
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。
	年度目標	日本語教育の質保証を目的に小金井キャンパスの関係各所と連携を図る。 ----- 科学実験において、COVID-19 対応のため、少人数クラス化し、感染対策を施して対面実験を行う。 ----- 教養教育充実のためにラーニングサポーター、授業アシスタント制度を活用する。
	達成指標	日本語教育科目調整会議の開催。 ----- COVID-19 対応のため、感染対策を施し、少人数クラス化した対面実験の実施。 ラーニングサポーター、授業アシスタント制度の活用。
	年度末報告	<p>執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 小金井地区における留学生の日本語教育を春・秋学期4クラスずつ基本的に対面およびハイフレックス方式で実施した（5週間はすべてオンライン授業）。授業の質保証のために、日本語教育科目調整会議が2回開催された。 ----- 科学実験では、動画を含めたオンライン教材を併用して少人数クラス化した対面実験を設計することで、COVID-19 に対応した。COVID-19 感染状況の悪化した春学期の一時期以外、春学期、秋学期ともに混乱なく対面実験を実施した。オンライン教材での学習と対面実験の併用を当初から設定したため、両者の連携が比較的良好で効果的な学習につながった。 ----- 物理系基礎科目を対象としてラーニングサポーターを活用し、化学基礎において授業アシスタント制度を活用した。 ----- 「情報リテラシーと表現技術」を対象として、ラーニングサポーターを活用した。 ----- 大人数の教養科目授業（アジア文化論など）はオンライン授業であったが、授業アシスタント制度を活用して期末にZoom ミーティングによる受講者全員の個人学習発表会が開催された。</p> <p>改善策 引き続き、COVID-19 の感染状況にフレキシブルに対応できる対面実験の設定・実施と、オ</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

			ンライン教材と対面実験の組み合わせによる、より効果的な授業設計を図る。
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標		教員による相互チェック体制の充実を図る。
	年度目標		継続して授業相互参観の充実を図る
	達成指標		オンライン授業参観も含めた授業相互参観の実施。
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価			S
理由			オンライン授業の相互参観をおこなった。今年度の参観数は12回(科目数:10)で、昨年度より大幅に増加した。
	改善策		引き続き授業参観を促進し、相互チェック体制の充実を図る。
No	評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
	中期目標		教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。
	年度目標		英語では前年度に引き続き英語力については入学年度4月と12月、および2年次次にTOEICテストを行い、継続的に教育効果の測定を行う。また、2020年度のオンライン授業実施経験から、ブレンディドラーニングの可能性を図る。 ----- 数学では期末試験が対面実施可能な場合、これまでと同様に統一試験を行っている4科目(24クラス)の素点データの度数分布表を作成する。実施不可能な場合に備え、代替手段を検討する。
	達成指標		入学年度4月と12月、および2年次次にTOEICテストを実施。 ----- 対面実施可能な場合、十分なデータが得られた科目の数を指標とする。不可能な場合、代替手段の実施、非実施を指標とする。
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価			S
理由			英語では入学年度4月と12月、および2年次次にTOEICテストを実施。2021年度のオンライン授業実施経験から、ブレンディドラーニングの可能性を検討するために、英語教員にアンケート調査を実施した。その結果を教員同士で共有した。 ----- 数学では一部科目を除いて対面での期末試験は実施できず、代替手段として統一試験を行っている。4科目の担当者(微積、線形代数ともに3名)でオンライン用の期末レポート問題を作成し共有した。統一問題作成でオンライン利用による試験問題作成スキルが向上した。 一方で、Hoppiiの操作性に起因して、作成した問題を兼任講師が利用することが難しいという問題も発生した。 ----- 諸語、例えば中国語の授業(基礎中国語I・II、中国語会話、中国語ライティング、上級中国語などの科目)では発音指導ビデオ、音声データの作成、アプリの活用などICTによる語学学習を実験的に導入し、新しい学習方法を試みた。 ----- 2022年度にソール市立大学に1名。また、昨年に中国の大学派遣留学生1名、一昨年にはフランス派遣留学生1名が選ばれるなど、諸語教育の教育効果が現れていると言える。 ----- 教職課程を履修する学生は前年度よりも増え、教員免許取得また教員採用された学生が例年より増えた(創生科学科教職課程の履修・教職実習修了者11名)
	改善策		TOEICテストを引き続き実施し、教育効果の測定を継続する。また、英語科目におけるブレンディドラーニングの可能性について継続して検討を行う。 数学については、対面での期末試験が実施できない可能性を想定して、統一問題作成の準備

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

			を学期当初より検討する。	
No	評価基準		教員・教員組織	
5	中期目標		学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。	
	年度目標		今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にする。	
	達成指標		理工学部・生命科学部執行部との情報交換連絡会の開催。	
	年度末報告		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A	
理由		必要に応じて、情報科学部執行部も含めオンラインおよび、メールによる情報交換を実施した。		
改善策	特になし。次年度も引き続き情報科学部執行部との情報交換を実施する。			
No	評価基準		教育研究等環境	
6	中期目標		情報科学部の KLAC 参加のプロセスを検討する。	
	年度目標		情報科学部学生の KLAC 諸語科目履修登録状況を把握する。オンライン授業下での諸語教育の効果を測る。	
	達成指標		情報科学部学生の KLAC 諸語科目履修登録状況の把握	
	年度末報告		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A	
理由		2021 年度履修登録終了後、運営委員会にて情報科学部の学生の履修登録数情報の情報共有をした。		
改善策	引き続き履修状況の把握に努める。			
No	評価基準		社会連携・社会貢献	
7	中期目標		小金井市・教育委員会・総合型スポーツクラブと連携したスポーツ交流事業について、新たな企画、実施体制及び広報体制について検討する。	
	年度目標		昨年度は COVID-19 感染拡大の影響で、全事業とも中止となったが、感染状況を見極めつつ、関係各所と連携の上、スポーツ交流事業の再開および地域スポーツイベントへの支援継続を模索する。更に次年度に向けて新たな事業の企画を検討する。	
	達成指標		スポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」の開催。 地域スポーツイベント「野川駅伝大会」への協力・支援。 次年度新規事業の企画検討。	
	年度末報告		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B	
理由		新型コロナウイルス感染拡大の影響により、開催予定であったスポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」および支援事業の地域スポーツイベント「野川駅伝大会」の全ての事業が、昨年度に引き続き中止となった。 ----- 小金井キャンパスに所属する留学生が、日本語スピーチコンテスト（小金井市主催）に 2 年連続で参加し、生命科学部の 1 年生が審査員特別賞を受賞した。KLAC の教員も審査員として参加し、地域活動に貢献した。		
改善策	スポーツ交流事業・支援事業の再開に向け、新型コロナウイルス感染状況を見極めつつ、開催時期や場所の変更なども視野に、事務局との協議・検討を進める。 また、次年度も留学生に日本語スピーチコンテストへの参加を積極的に呼びかける。			
【重点目標】 COVID-19 後を見据えた新たな教授法の検討など教員同士の連絡を密にし、小金井キャンパスにおける教養教育の充実を図る。 【目標を達成するための施策等】 KLAC 科目は多様であるため、分科会ごとに、科目特性に応じたオンデマンド・双方向授業などのあり方を検討し、ZOOM 会議などを通じて、専任・兼任教員間の連絡を密にし、情報共有を図る。				

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S」：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

【年度目標達成状況総括】

年度の重点目標であった「COVID-19 後を見据えた新たな教授法の検討など教員同士の連絡を密にし、小金井キャンパスにおける教養教育の充実を図る」については、専任・兼任教員を含めた Zoom 会議の開催などによって可能な限り達成されたといえる。昨年度に引き続きコロナ禍により地域スポーツイベント事業、数学科目の共通試験は行われなかった。科学実験については、おおむね春秋学期ともオンライン授業の成果も取り入れつつ、対面授業を混乱なく円滑に実施できた。オンライン教材での学習と対面実験の併用を当初から設定したため、両者の連携が比較的良好で効果的な学習につながった。コロナ環境下ではあるが、日本語授業、情報科学部での諸外国語授業についても、大きな問題なく授業運営がなされている。オンライン授業の下で、ラーニングサポーター制度、授業支援アシスタント制度を活用し、授業相互参観も実施した。

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】

KLAC では、具体的な目標を設定した項目については概ね達成しており、評価できる。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、開催予定であったスポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」および支援事業の地域スポーツイベント「野川駅伝大会」の全ての事業が、2020 年に引き続き中止となったことはやむをえないことであるが、こうした中で、小金井キャンパスに所属する留学生が、日本語スピーチコンテスト（小金井市主催）に 2 年連続で参加し、生命科学部の 1 年生が審査員特別賞を受賞したこと、KLAC の教員も審査員として参加し、地域活動に貢献したことは評価できる。

IV 2022 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。
	年度目標	運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検を行い、内部質保証を維持する。
	達成指標	自己点検委員会を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	カリキュラム変更（2023 年度）をおこない、合わせて、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図る。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 理科分科会では、2023 年度生命科学部カリキュラム変更と連動して、新規リメディアル科目の設置、理系教養科目の見直し、時間割の見直しを行う。 諸語分科会では、語学教育の質向上とスリム化対応を目的に、諸語教育のカリキュラム変更に向けた検討を進める 教養教育の充実のために、ラーニングサポーター、授業アシスタント制度を活用する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 理科分科会では、リメディアル科目の設置と理系教養科目の見直しを含む新カリキュラムを完成させる。 諸語分科会では、新カリキュラムを完成させる。 ラーニングサポーター、授業アシスタント制度を活用する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 教員による相互チェック体制の充実を図る。 ポスト・コロナを見据えて、COVID-19 の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育方法を検討する。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 継続して授業相互参観の充実を図る。 ハイフレックスを含めた対面授業、オンライン授業、オンデマンド授業を効果的に組み合わせた教養教育を実施する。 ハイフレックスを含めた対面授業においては感染対策を促進する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> オンライン授業参観も含めた授業相互参観を実施する。 ハイフレックス授業に対応した授業設計や、対面授業における感染対策について、各分科会の意見聴取をおこなう。 理科分科会では、各授業形態の科目数を調べ、各授業形態の教育効果を検討する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

5	中期目標	教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> 英語分科会では、前年度に引き続き1年次4月と12月、および2年次12月にTOEICテストを行い、継続的に教育効果の測定を行う。また、2020年度および2021年度のオンライン授業実施経験から、ブレンド型学習の可能性を探る。 数学分科会では期末試験が対面実施可能な場合、これまでと同様に統一試験を行っている4科目(24クラス)の素点データの度数分布表を作成する。実施不可能な場合に備え、代替手段も検討する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 英語分科会では、1年次4月と12月、および2年次12月にTOEICテストを実施する。 数学分科会では、期末試験が対面実施可能な場合、十分なデータが得られた科目の数を指標とする。不可能な場合、代替手段の実施、非実施を指標とする。
No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。
	年度目標	今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にするとともに情報科学部との情報交換を行う。
	達成指標	理工学部・生命科学部執行部との情報交換の機会を設ける。また情報科学部とも状況を共有する。
No	評価基準	教育研究等環境
7	中期目標	COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、より効果的な授業設計を図るために、必要な教育研究環境を検討する。
	年度目標	今年度に本格化したハイフレックス授業に対応できる教育研究環境を検討する。
	達成指標	ハイフレックス授業に対応した教育研究環境について、各分科会の意見を聴取する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	行政や地域団体との連携を強化して、交流事業の継続的实施や新たな企画について検討し、地域との交流を深める。
	年度目標	2年間開催が中止となっていた「スポーツ交流事業」「地域スポーツイベント支援事業」の再開を、COVID-19の感染状況を勘案して検討する。
	達成指標	スポーツ交流事業「卓球大会」「軟式野球教室」の開催および地域スポーツイベント「野川駅伝大会」への協力・支援をおこなう。また、次年度に向けて新たな事業の企画を検討する。
<p>【重点目標】 COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、より効果的な授業設計を図るために、必要な教育研究環境の充実を図る。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 KLAC科目は多様であるため、分科会ごとに、科目特性に応じた教育研究環境を検討することで、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図る。そのために、専任・兼任教員間の連絡を密にし、情報共有を図る。</p>		

【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

KLACでは、「教員・教員組織」に関する2022年度を初年度とする中期目標として、カリキュラム変更(2023年度)をおこない、合わせて、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図ることなど3項目を掲げており、初年度である2022年度は、それぞれの項目に即した年度目標が示されている。中期目標・年度目標としては、いずれも適切かつ具体的に設定されていると評価できる。2022年度は、ポスト・コロナを見据えて、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、より効果的な授業形態・教育方法その他、必要な教育研究環境の充実を図る道筋をつけることを期待したい。

【大学評価総評】

3センターともに、COVID-19の感染状況にフレキシブルに対応できる、効果的な授業形態・教育方法を模索・検討し、実践してきたことは高く評価できる。

設置2年目を迎えたLFセンターは、新型コロナ禍にあつて、新しい対面・オンライン教育学習に向

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

け、高い効果を期待する柔軟な各種取り組みを実施できた点が評価できる。ポスト・コロナを見据えた長期的な視野に立って、教育学習における実効的な支援の在り方を検討し実践することを期待したい。

ILACは、2017年度にスタートした新カリキュラムに基づく教育課程・教育内容の効果や課題を検証し課題解決に積極的に取り組むなど設定した目標を概ね達成できた点が評価できる。ただ、創設から約20年が経過し、ILACを取り巻く環境も変化中、新型コロナウイルス感染症への対策など新たに対応すべき課題も増えてきていることから、今後、想定される変化にも対応できるよう長期的な視野に立った課題の検証・検討を期待したい。

KLACでは、分科会ごとに、コロナ禍にあつて、科目の特性に応じた教育研究環境を検討することで、教養教育の充実を図るとともに、学生の多様な価値観を育成するための教養教育の改善を図ってきたことは高く評価できる。ポスト・コロナを見据えて、これまで以上に、教員同士の連絡を密にし、情報共有を図るとともに、新たな教授法の検討に取り組むなどなお一層の教養教育の充実を図ることを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。